

3. まとめ 御蔵遺跡は過去の数回にわたる調査において、弥生時代前期から中世の遺構・遺物を確認しているが、古墳時代終末期から平安時代前期のものが最も多く、今回の調査でも同時期の遺構が数多く検出された。また、遺構の密度からすると御蔵遺跡における集落の中核部であることはほぼ間違いないであろう。

また、同時期にあたる大型の掘形の柱穴で構成されている掘立柱建物や精巧な木枠をもつ井戸といった遺構、あるいは、瓦や施釉陶器といった遺物など、一般的な集落遺跡ではあまりみられないものが近接地における調査で比較的多く存在しており、周辺集落と比べて社会的に地位の高い集落であったことがうかがえる。

第3次調査及び今回の調査においては、多大な成果を挙げることができ、遺跡の様相もかなり明らかになってきた。周辺部では区画整理事業に伴う発掘調査も実施されており、その全容が明らかになるのも遠い未来ではないように考えられる。

第3次調査区



fig. 226 第3・22次調査区平面図



fig. 227 A~C区全景



fig. 228 D~F区全景

みくら 29. 御蔵遺跡 第24~27・29・33・34・36次調査

1. はじめに

平成7年1月17日に起きた阪神・淡路大震災では、神戸市長田区御蔵通一帯は甚大な被害を受けた。御蔵地区では、その復興・復旧工事に伴って、平成9年から市営住宅・個人住宅の建設や区画整理事業に伴う区画街路の築造工事に先立って、発掘調査を実施してきている。

これまでの調査の結果、奈良時代を中心として、古墳時代初頭から中世にかけての遺構・遺物を確認している。

今回、御蔵西地区内において個人住宅建設に先立つ発掘調査を実施した。以下に、この一連の調査の概要を示す。

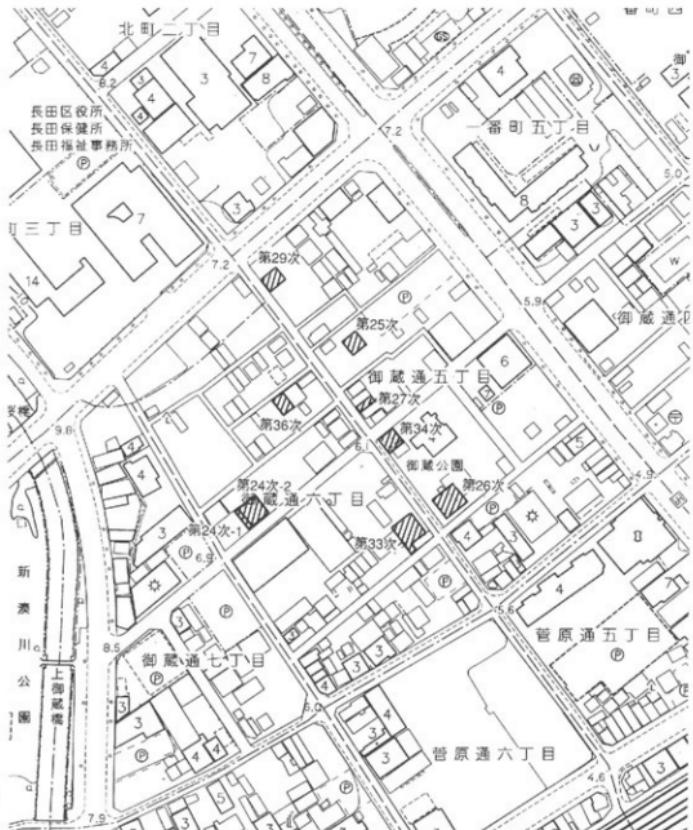


fig. 229
調査位置図
1 : 2,500

第24次-1・2調査

1. 調査の概要 今回の調査については、南側の道路からの水道・電気等の引き込み工事の関係から、敷地の南端部についてまず調査を実施（第24次-1調査）し、その後改めて敷地の残り部分について調査を実施（第24次-2調査）した。

両調査ともに、工事影響深度まで実施したものである。

24次-1 調査地は各所で建物基礎による擾乱を受けていたが、3層の遺物包含層、3面の遺構面を確認することができた。

基本層序 敷地の旧耕土の下に、中世の遺物包含層である灰色砂質シルト及び暗紫灰色砂質シルトが存在する。この下層は第1遺構面基盤層の暗灰色砂質シルト（奈良時代から平安時代遺物包含層）である。以下上層より順に、第2遺構面基盤層の暗灰色シルト質細砂（奈良時代遺物包含層）、第3遺構面基盤層の暗灰褐色砂質シルト及び暗茶褐灰色細砂である。

第1遺構面 大半が建物基礎による擾乱を受けており、南部で溝を1条のみ検出した。

S D 101 調査区南端部で検出したほぼ東西方向の溝で、南側で実施した第14次-14調査でもこの溝に対応すると考えられるが、須恵器、土師器の小片が出土しているが何れも微細であり、時期の特定は困難である。

第2遺構面 北側を中心に建物基礎による擾乱を受けている。溝2条を検出した。

S D 201 S D 201とS D 202は、ともに幅25cm程度、深さ8cm程度の南北方向に走る溝で、須恵器、土師器が出土している。何れも微細であるが、奈良時代から平安時代頃と考えられる。

第3遺構面 中央や北寄りは擾乱を受けているが、ほぼ調査区全域で遺構を確認した。

検出遺構 溝6条、土坑6基、ピット7基を検出した。

溝はすべて南北方向で、S D 302のみ他の溝よりやや東に振っている。また、検出した溝の多くは、第14次-14調査で検出した溝と同一の遺構と考えられる。また、今回の調査で土坑として検出した遺構の中には、周辺地の調査成果を考慮した場合に柱穴として認識できるものも含まれている可能性もあるが、ここでは、調査時の所見のとおり記述する。

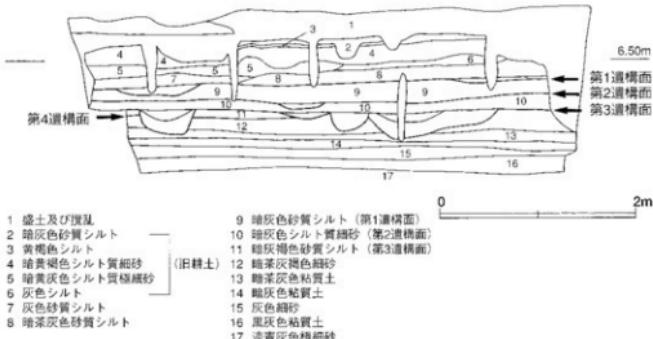


fig. 230
第24次-1調査区
西壁断面図

- S D302 調査区内ほぼ全域を貫流する溝で、幅25cm前後、深さは検出面から10cm前後である。須恵器、土師器が出土している。
- S D304 調査区北寄りで検出した溝で北東側は調査区外へ続き、南側の一部を S D302に切られている。南西側は建物基礎による攪乱を受けている。幅約70cm、深さは検出面から12cmである。奈良時代と思われる須恵器、土師器が出土している。
- S D305 調査区南寄りで検出した溝で、幅40cm前後、深さは検出面から18cmである。奈良時代の須恵器、土師器が出土している。
- S K302 調査区中央部で検出した土坑で、東側が調査区外へ延びるため全体の規模は不明である。深さは検出面から10cmである。奈良時代と考えられる土師器が出土している。
- S K303 調査区南端部で検出した土坑である。西側を S D305に切られ、南側が攪乱を受けているため全体の規模は不明である。深さは検出面から約20cmで、埋土は2層に分かれる。奈良時代の須恵器、土師器が出土している。
- S K305 調査区中央部南寄りで検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.83m、短径1.05m、検出面から深さは9cmである。
掘形内の中央部より東側で骨が1点出土したが、この1点以外には出土しておらず、この土坑の性格は不明である。この他、埋土中から土師器の小片が出土している。
- S K306 調査区中央部南寄りで検出した土坑であるが、S D302に切られている。径40cm、深さは検出面から21cmで、土師器の小片が出土している。
- ピット 計7基のピットを検出したが径20cm前後、検出面からの深さ5~35cmのものである。これらのピットが建物を構成するものかどうかについては確認することはできなかった。

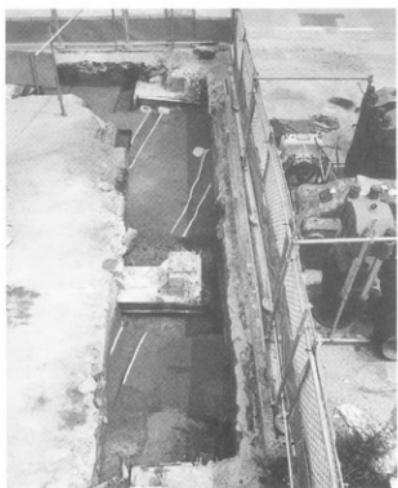


fig. 231 第24次-1調査区第1遺構面



fig. 232 第24次-1調査区第2遺構面

- 24次-2 既存のコンクリート基礎の影響を大きく受けおり、広範囲に擾乱を受けていた。
T.P.6.300mで第1遺構面、T.P.6.100mで第2遺構面、T.P.6.000mで第3遺構面、T.P.5.800mで第4遺構面をそれぞれ確認した。
- 第1遺構面**
検出遺構 大半は既存の基礎などの擾乱を受けており、調査地南半の一部に基盤の間で遺構面を確認した。現在の町割と同じ方向の斷溝を数条検出した。また、南西隅では第24次-1調査でも確認しているSD01の北肩の続きを検出した。南肩と東に続きが検出されないことから、溝状遺構というよりも耕作に伴う段状遺構と考えられる。
- 第2遺構面**
検出遺構 出土遺物は、極少量の中世の須恵器、土師器片のみである。
- 第3遺構面**
検出遺構 溝は、幅50cm前後で深さ5cmの規模である。大半は耕作に伴うものと考えられるが、SD205は幅2m、深さ15cmの規模をもつもので、区画及び水路としての性格が考えられる。

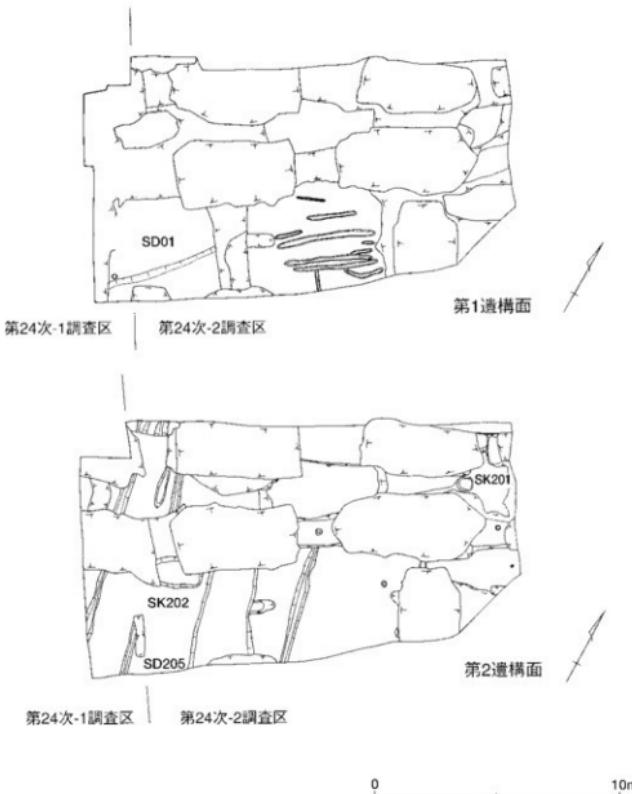


fig. 233
第24次調査区第1・2
遺構面平面図

土坑は、SK201が直径55cm、深さ30cmの規模であり、SK202が短辺1.2m、長辺1.8m以上、深さ16cmの規模である。

遺構からは奈良時代から平安時代の須恵器と土師器が出土した。

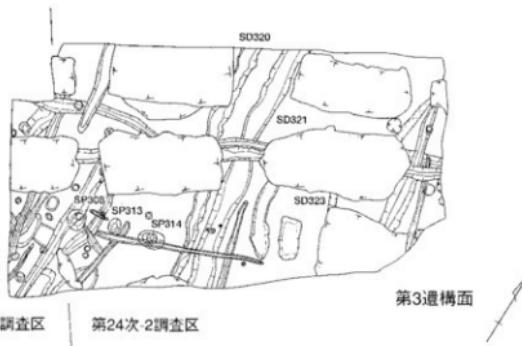
第3遺構面

溝とピット多数を検出した。

検出遺構

溝の大半は、幅20~40cm、深さ10cm程度の鋤溝であるが、SD320・321は、幅0.5~1.0m、深さ15~30cmの規模をもつものである。この2条の溝からは、奈良時代の須恵器・土師器が多数出土した。また、SD323は、幅30cm、深さ5cmの南北方向の小規模な溝であるが、溝の中から土馬が出土した。この土馬は、頭部と足の部分が損失していたが、体部の長さ13cm、高さ7cmのものである。背には、鞍を表現している。

ピットは、直径20cm前後のものが散在しているが、SP308・313・314の3基については、直径0.9~1.2m、深さ30~50cmの規模をもつもので、東西方向に並んでいる。建物としては、対になる柱穴が攢乱及び調査区外にあたるため不明である。



第24次-1調査区 第24次-2調査区

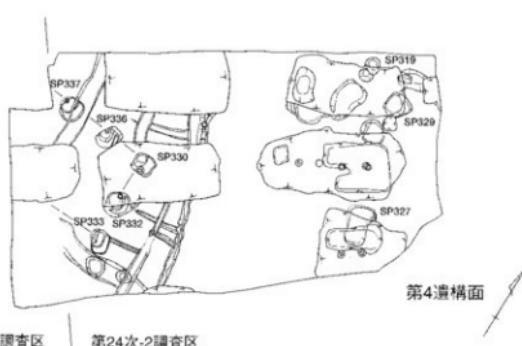


fig. 234
第24次調査区第3・4
遺構面平面図



第4遺構面 第24次-1調査区と当調査区の東には存在しない暗灰褐色砂質シルトが、調査区西半に堆積しており、この下層でピット18基、溝10条を検出した。

東半では暗灰褐色砂質シルトが存在しないことから、第3遺構面と第4遺構面を同一面で検出したが、第4遺構面の遺構については、遺構内出土の遺物（飛鳥時代）と遺構の深度から判断したほか、深い擾乱内に残存する遺構についても認定することとした。

西半で検出したピットのうち、S P330・332・333・336・337はL字に並んでおり、2間×2間以上の掘立柱建物（SB01）を構成する柱穴と考えられる。これらの柱穴は、直径1m前後、深さ70cm前後の大型のもので、断面観察では柱痕を確認できなかったが、底部に柱の沈み込みの痕跡を検出した。この柱の沈み込みの痕跡は、掘形西端にあり、それそれが一直線で結ぶことができる。また、掘形の西壁が抉れたようになっているのがみられる。以上のような状況から、柱は抜き取られたものと考えられる。

東半で検出したピットは、北側に集中している。大きな擾乱に削られて底部分しか残存していないが、ピットの規模は、SB01の柱穴と同様もしくはそれ以上のものであり、1棟ないしは2棟の建物が存在するものと考えられる。また、S P319・329からは、礎板と考えられる木材が出土した。東半の南側では、S P327とSD323を検出した。S P327は長辺1.6m、短辺1.1m、深さ90cmの大型のものである。周辺に対となるものがないため遺構の性格は不明であるが、他の建物を構成する柱穴の規模から判断して、柱穴として扱った。建物として対の柱穴が、東南方向に存在する可能性が考えられる。

2. まとめ 調査の結果、第1遺構面（中世）、第2遺構面（奈良時代から平安時代）、第3遺構面（奈良時代）、第4遺構面（飛鳥時代）の生活面を検出した。

地形的には東が高く西方へ緩やかに傾斜する地区である。飛鳥時代から平安時代にかけての遺構が集中している。



fig. 235 SB01

第 25 次 調 査

1. 調査の概要 古墳時代初頭と奈良時代から平安時代と考えられる 2 面の遺構面を確認した。

基本層序

上層より現代盛土、旧耕土層、奈良時代から平安時代遺物包含層、洪水砂、古墳時代初頭遺物包含層の順に堆積しており、奈良時代から平安時代遺物包含層下層の洪水砂の上面が第1遺構面である。さらに古墳時代初頭遺物包含層の下層上面が第2遺構面となる。第1遺構面が現地表面下50~70cm、第2遺構面が現地表面下90~110cmでそれぞれ確認した。

第1遺構面

小規模な溝状遺構（SD01）を検出した。遺構内からはほとんど遺物が出土せず、時期は不明であるが、周辺地の調査成果から概ね奈良時代から平安時代に属すると推定される。

第2遺構面

検出した遺構は少なく、調査区西端で溝（SD02）1条を検出したほか、小規模なビットを数基検出している。SD02からは古墳時代初頭（庄内併行期）に属する遺物が数点出土しているが、他の遺構からは土器類の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明であるものの、遺構面を覆う遺物包含層からも古墳時代初頭（庄内併行期）の遺物しか確認されていないため、SD02とはほぼ同時期のものと推定される。

2. ま と め

御藏遺跡は過去の数回にわたる調査においては、遺構の密度も高く、遺物の出土量も多いが、今回の調査において検出した遺構は少なく、遺構内からの遺物の出土も少ない。しかしながら、第2遺構面直上の遺物包含層には遺物が比較的密集する部分もあり、近接地に集落が存在する可能性が示唆できる。資料的には乏しいが、御藏遺跡の様相の解明に向けての一端を担う成果であるといえよう。

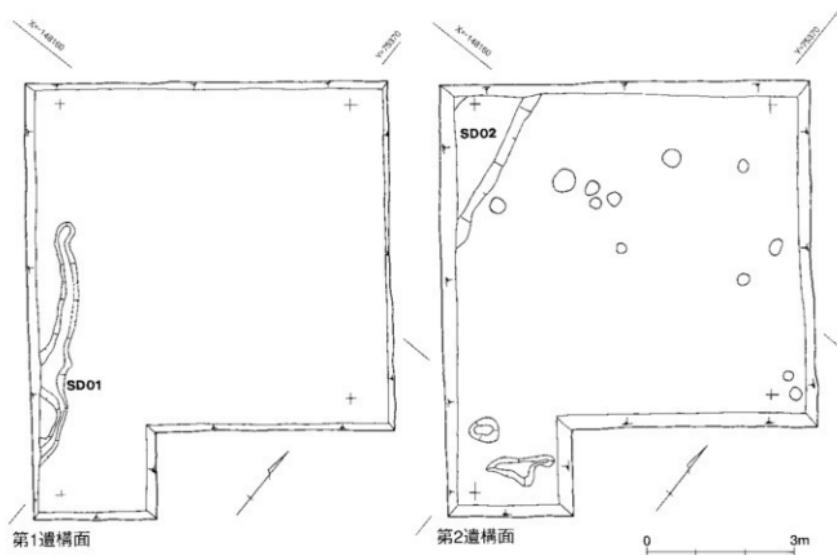


fig. 236 第1・2遺構面平面図

第 26 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査は、工事影響範囲について、工事掘削影響深度までを対象に実施した。

基本層序

現地表下80cmまでは盛土及び旧耕土であり、その下層の厚さ10cmの灰色粘性砂質土から中世から飛鳥時代までの遺物が出土する。その下層に庄内式期の遺物包含層である黒褐色粘性砂質土が存在し、この層の上面が遺構面である。その下層は基盤層となる暗黒褐色粘性砂質土となっている。

検出遺構

黒褐色粘性砂質土上面で溝1状を検出した。

溝は、幅80cm、深さ10cmのものである。

遺構面の基盤層である黒褐色粘性砂質土では、調査地の東端において、庄内期の遺物片が集中して大量に出土したが、下層の暗黒褐色粘性砂質土上面では遺構は存在しなかった。

2. ま と め

調査の結果、当地区的飛鳥時代から中世に関しては、土層の観察から耕作地として利用されていることが考えられ、検出した溝も耕作に伴うものと思われる。

庄内式期には、調査地の東端で南北幅一面に遺物が集中して出土した。周辺の調査結果を考慮しても、当調査地は、地形的に西方へ緩やかに傾斜し、一段下がった水田域に至るまでの地域に当たると考えられる。当該地区的東端に遺物が集中することから、東方に集落域が存在し、西方には水田域が広がるものと考えられ、今回の調査地は両者の中間地帯に位置するものと考えられる。

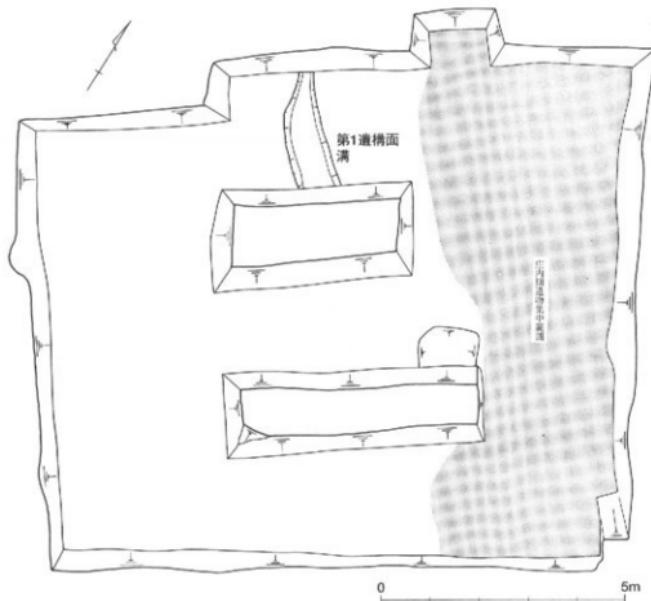


fig. 237
調査区平面図

第 27 次 調 査

1. 調査の概要 現地表高は6.7m前後である。工事影響範囲の約24m²について発掘調査を実施した。

基本層序 整地土の下層に耕土（淡黒色粘性砂質土）、床土（黄褐色粘性砂質土）、中世頃の耕土と考えられる灰色粘性砂質土の堆積層が存在し、その下層に奈良時代の土器を含む暗褐色粘性土が局部的に薄く堆積するが、調査区の大半は黄灰褐色極細沙～茶褐色粗砂で構成される洪水砂（層厚約40cm）で覆われている。洪水砂の下層の茶褐色～青灰褐色シルト上面で遺構（畦畔）を検出した。

現地表面から茶褐色～青灰褐色シルトまでは約1.1mの深さがある。畦畔検出面の標高は約5.6mである。

検出遺構 畦畔状の高まりを2条確認した。幅30~50cm、高さ約3~5cm程度で、遺存状態は悪い。畦畔の方向は東西、北西から南東の2方向があるが、調査範囲の制約のため水田の区画・形状等は判らない。

2. ま と め 今回の調査では、水田畦畔とみられる畦畔状の高まりを2条確認した。検出層から遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果からみて、弥生時代末期から古墳時代初頭頃の水田遺構と考えられる。このことから、今回の調査地は、菟葵川によって形成された後背湿地の部分にあたると判断される。

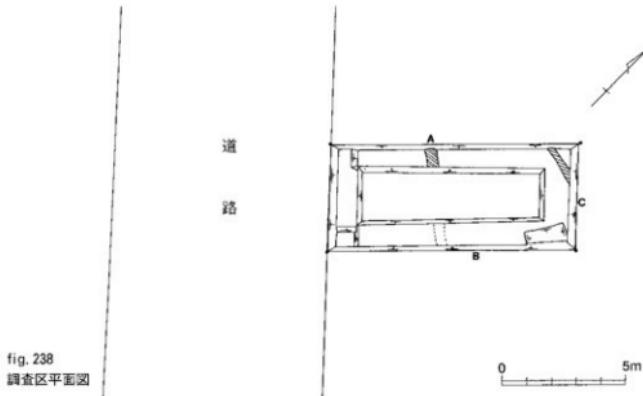


fig. 238
調査区平面図

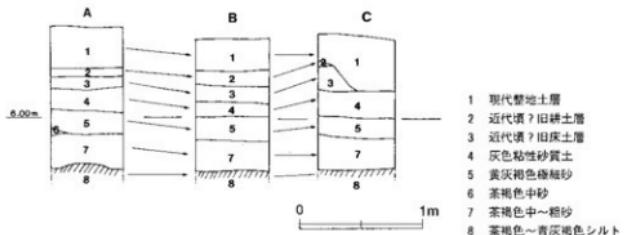


fig. 239
調査区断面図

第 29 次 調 査

1. 調査の概要 基本層序 現地表下30~60cmまでは盛土及び擾乱であり、その下層に同1.3mまで淡墨灰色粘質土、淡黄灰色粘性砂質土、乳茶灰色粘性砂質土、乳黃灰色粘性砂質土、濁灰褐色砂質土、乳黃白色粘質土、乳灰色粘質土、黒褐色粘性砂質土が堆積している。

遺物は、乳茶灰色粘性砂質土で3点の土師器の小破片と黒褐色粘性砂質土から1点土師器の小破片が出土したのみであった。遺構は、精査を実施したが確認していない。

乳茶灰色粘性砂質土は、土質から耕土と考えられるが、畦畔などは検出していない。

2. ま と め 調査の結果、当地区に関しては、御藏遺跡の北端にあたり、集落域から後背湿地へつながる地点に位置していると考えられる。

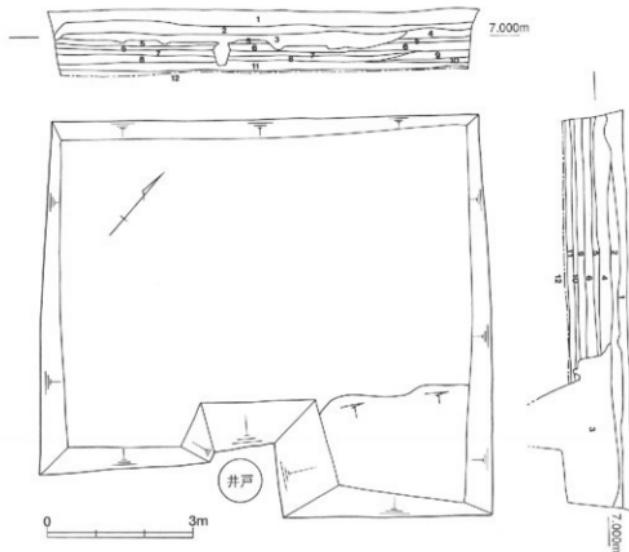


fig. 240
調査区平・断面図



fig. 241 調査区全景



fig. 242 調査区北壁

第 33 次 調 査

1. 調査の概要

今回の調査地は、水田鞋畔が検出された地点と同様な状況が予想された。今回の調査区内では暗黒褐色シルト・黄色細砂が認められたほか灰褐色砂混シルト（中世遺物包含層）が存在する。遺構面を1面確認した。

検出遺構 黄色細砂を掘り下げた段階で、下層の灰褐色砂混シルト上面で溝を3条検出した。

溝は、幅20~40cmで、探さは10cm前後のものである。溝の方向はN38°Eを中心として一定の方向に並んで掘削されている。そのうち、SD01とSD02の間には若干の盛土状のものを断面観察によって確認しており、大畦畔または道路状遺構の側溝の可能性がある。

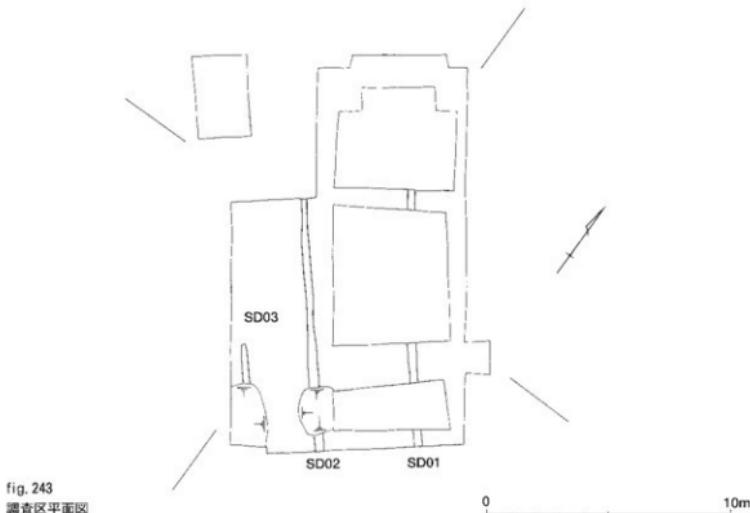
なおSD02からは若干の出土遺物があり、13世紀前半代の遺構と考えられる。

2. ま と め

今回の調査では、水田関連の遺構を検出した。これらの方向性がN38°Eを中心として存在しており、この方位は明治時代の地図にみられる條坊とほぼ一致している。このことからこれらの方向性は13世紀前半代までは遡る可能性がある。

大開遺跡で検出している13世紀前半頃の側溝もほぼ同一方向をとり、離れた地点においてもほぼ同様な方向性を示すことが窺われる。

このような方向性を示す範囲がどの程度の広がりをもつかという点については、今後の調査の進捗状況によって判明すると考えられるが、13世紀前半にはほぼ完成していた可能性がある。この調査成果は、上限の時期を13世紀前半まで遡る可能性を示すものの、およその方向性の決定が、福原京の頃まで遡る可能性が残されているかどうかについては、まだ否定的な根拠となるものではないと考えられる。



第 34 次 調 査

1. 調査の概要 現地表面以下の土層は、盛土・擾乱、暗灰色粘質土（旧耕土）、緑灰色粘質土、青灰色砂、青灰色細砂質シルト、黄褐色細砂、にぶい黄褐色粗砂、黒褐色～暗褐色粘質土、灰黃褐色粘質土である。
- 検出遺構 調査区東隅で南北方向の溝（SD01）を検出した。幅85cm、深さ25cmで、黒褐色粘質土上面から切り込む。埋土は黄褐色砂である。遺物は出土していない。
- 出土遺物 遺物は、褐色砂と黒褐色粘質土から土師器が少量出土した。
2. ま と め 今回の調査は工事掘削深度までの実施したが、調査区内は以前に存在した建物の基礎による擾乱が著しく、工事影響深度まではとんどが擾乱土・盛土であった。そのため出土遺物もわずかで、遺構も東隅で検出した溝に限られる。ただし最終検出面以下は擾乱の影響が少なく、検出した溝の存在から、下層や周辺に遺跡が存在する可能性は残されている。

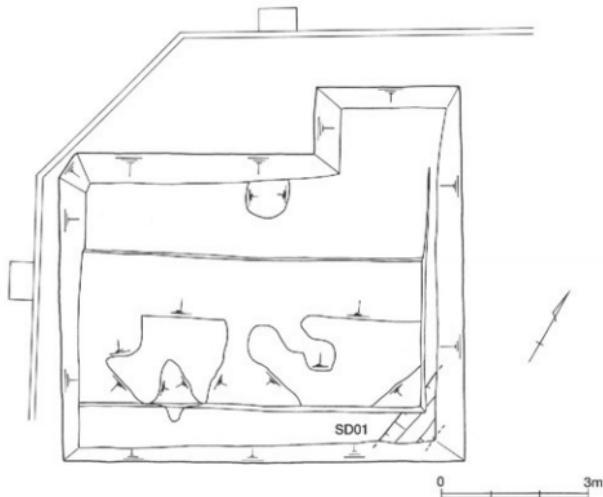


fig. 244
調査区平面図

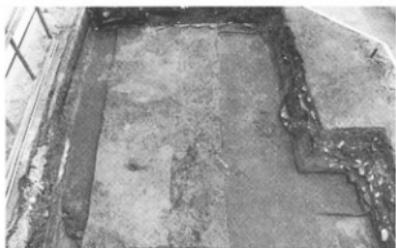


fig. 245 調査区全景

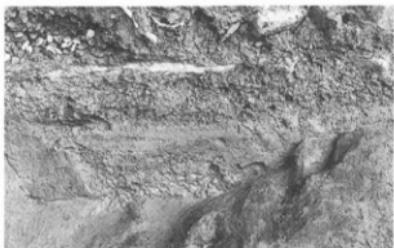


fig. 246 溝状遺構断面

第 36 次 調査

1. 調査の概要 現代の盛土直下から旧耕土が約4面確認できるが、時期的に把握し得るのは第7層のもので、14世紀末から15世紀初頭と考えられる。それの床土を除去すると、奈良時代から平安時代の遺物包含層である灰色シルト（やや粘質）が堆積している（第4層）。遺物包含層上面の標高はT.P.約6.50mである。須恵器・土師器とともに縄釉陶器片が出土している。

ピット 第4層を除去した段階で、調査区東半部で計11基のピットを検出した。ただし何れも、出土遺物がなく、時期を特定することは困難である。

S X01 調査区西半において検出した落ち込みで、最上層に黄灰色～黒褐色シルト～粘土が薄く堆積し、東辺が弧状を呈するもので、このシルト～粘土除去後に内部からピット計6基、溝1条が検出された。

黄灰色～黒褐色シルト～粘土層からは、極少量の土器片が出土し、弥生時代終末ないし古墳時代初頭ともみられるが、細片のため断定できない。ピット・溝からも遺物は出土していない。

S X01内のピット・溝を検出した面は、灰色シルト混じり細砂で、調査区東半部でピットが検出した土層とは全く異なる。シルト混じり細砂は、少なくともこれより下に約40cmは堆積していることを確認しているが、工事影響深度との関係でそれ以下については不明である。S X01南端、シルト混じり細砂中から古墳時代初頭頃の広口長頸壺が出土した。

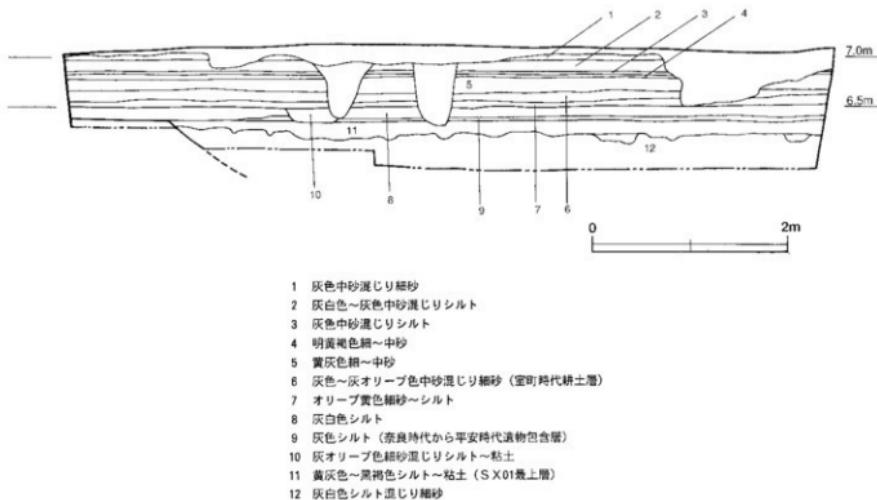


fig. 247 調査区西壁断面図

2. ま と め SX01の性格は不明であるが、大きな落ち込みの一部である可能性が高い。

また調査区東半についても、西隅に向かって深くなる落ち込みで、SX01がその最終埋土である可能性も否定できないが、調査地区の制約から把握できなかった。

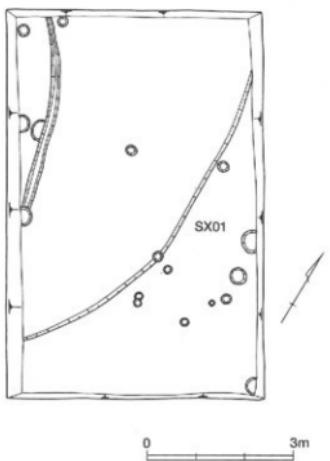


fig. 248 調査区平面図



fig. 249 SX01遺物出土状況



fig. 250
調査区全景

1. はじめに

神楽遺跡は、昭和54年神戸市営地下鉄建設に伴う調査で発見された古墳時代から平安時代におよぶ集落遺跡である。神楽遺跡の調査は12次におよび、現在の神楽小学校を中心とした遺跡が存在すると考えられている。今回の調査は区画整理事業に伴う街路築造工事部分について実施した。



fig. 251
調査位置図
1 : 2,500

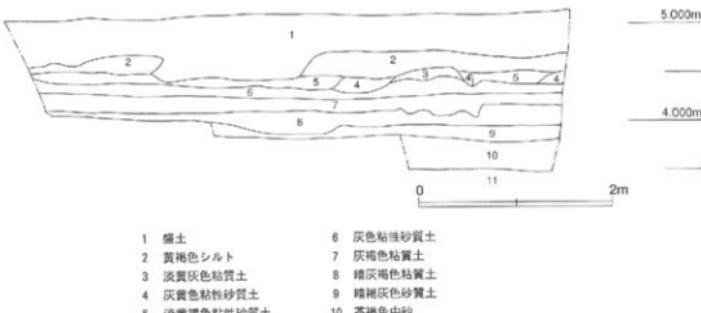


fig. 252 調査区東壁断面図

2. 調査の概要 調査区全体に現地表下40cmまで現代の盛土層があり、その下層に洪水層と考えられる黄褐色シルト層が堆積している。この黄褐色シルト層を除去した段階で、調査区に平行して、北東から南西方向の畦畔を1条検出した。畦畔の上面幅は40cmである。畦畔両側の水田耕土は、淡黄褐色粘性砂質土で微量の土師器片を含む。畦畔の下端幅は90cmで、下層の灰色粘性砂質土を形成したのち淡灰黄色粘質土を盛り上げて造成している。畦の残存高は20～30cmを測る。

畦畔下の基盤層である灰色粘性砂質土内からは、瓦器・土師器が比較的多量に出土したが、その下面の暗灰褐色粘質土上面では遺構は検出していない。

3. まとめ 今回の神楽遺跡の調査では、遺跡本体の集落跡は検出していない。当該地は室町時代から鎌倉時代以前の低沼沢地であり、中世によく陸地化したと考えられる。さらに中近世以降水田畦畔が造られ、耕地化したと考えられる。

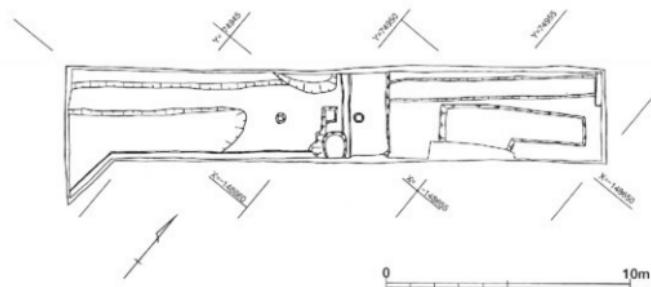


fig. 253
調査区平面図

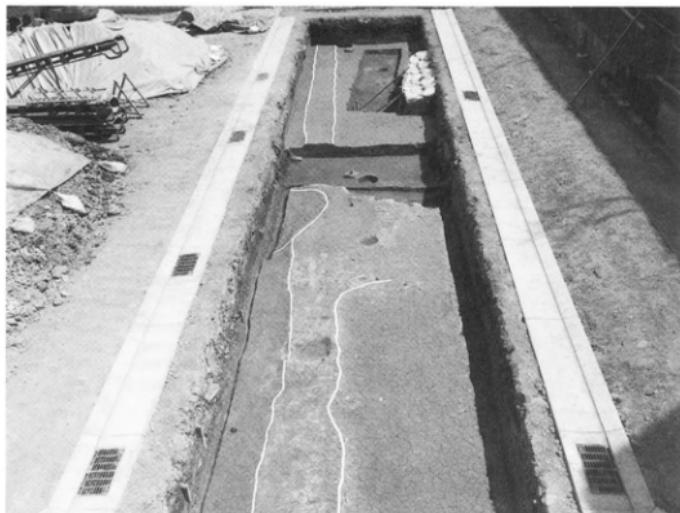


fig. 254
調査区全景

みず かさ 31. 水笠遺跡 第1次調査

1. はじめに

水笠遺跡は、平成11年度に実施した、新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業に伴う試掘調査で遺構と遺物が検出されたことによって発見された遺跡である。

現在遺跡の範囲は長田区水笠通2丁目から3丁目あたりと考えられているが、本調査は今回が最初であるため、詳細は明らかでなかった。よって、試掘調査の際に設定した試掘坑の位置に近い地区における、区画街路予定部分は全面調査を行うこととし、試掘坑位置から離れた地区については、幅約1.2mのトレンチ調査を行い、遺跡の範囲を確定した後に調査区を設定した。

よって、平成11年度の事業範囲のうち、南側に位置する東西方向の区画街路部分（第1トレンチ）は全面調査とし、南北方向の2本の区画街路部分（第2・3トレンチ）は遺構並びに遺物包含層の確認された範囲までの調査とした。

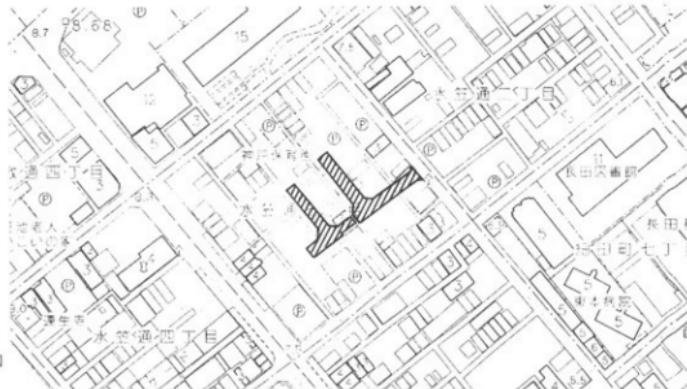


fig. 255
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

現地表面以下の土層は、盛土、耕土、褐色中砂、灰褐色中砂、灰色砂混じりシルト、黒褐色シルト（遺物包含層）、黄褐色シルト（遺構面基盤層）となる。

ただし、遺構面基盤層となる黄褐色シルトは北に向かって徐々に高くなり、第2・3トレンチの北半では遺物包含層である黒褐色シルトは存在しない。

検出遺構

溝11条、ピット20基を検出した。

S D04

第1トレンチの西半部中央において北西から南東に向かって流れ、調査区内で緩やかな円弧を描きながら北東に向きを変え調査区北側に延びる。第2トレンチの北側でやや東に向きを変えて、S D12に続くと思われる。幅1.8m、深さ40cmを測り、断面は緩やかなV字形を呈する。弥生時代中期後半の壺の破片が出土している。

S D08

第2トレンチの中央部で検出した溝で、調査区内を北西から南東に向かって流れ、南側は東に方向を変えて流れる。幅1.9m、深さ30cmを測り、断面は緩やかなV字形を呈する。第1トレンチの東側において溝の延長線上で、S D04とS D12に合流するものと思われる。

- SD09 第2トレンチの中央部で検出した溝で、SD08に切られる。調査区内を北東から南西に向かって流れる。幅1.3m、深さ40cmを測り、断面は緩やかなV字形を呈する。
- SD12 第3トレンチの南部で検出した溝で、調査区内を南西から北東に向かって流れる。SD04に続く溝と考えられる。幅1.5m、深さ30cmを測り、断面は緩やかなV字形を呈する。
- SD05 第1トレンチの西半で検出した溝で、調査区内を北から南に向かって流れる溝で、幅30cm、深さ20cmを測り、断面はU字形を呈する。
- SD11 第3トレンチの北部で検出した溝で、調査区内を北から南に向かって流れる。幅30cm、深さ20cmを測る。
- ピット 20基を確認した。掘形の直径約20cm、深さ約40cm、柱痕の直径約15cm程度のものが多い。建物としてまとまるものはなかったが、付近に掘立柱建物が存在する可能性がある。

3. まとめ 今回の調査は水笠遺跡における最初の調査であり、これまで知られていなかった遺跡の存在が確認された意義は大きい。今回の調査では主に溝が確認されたのみであり、その溝の性格等も明らかではないが、付近に弥生時代中期の集落が存在する可能性が考えられる。

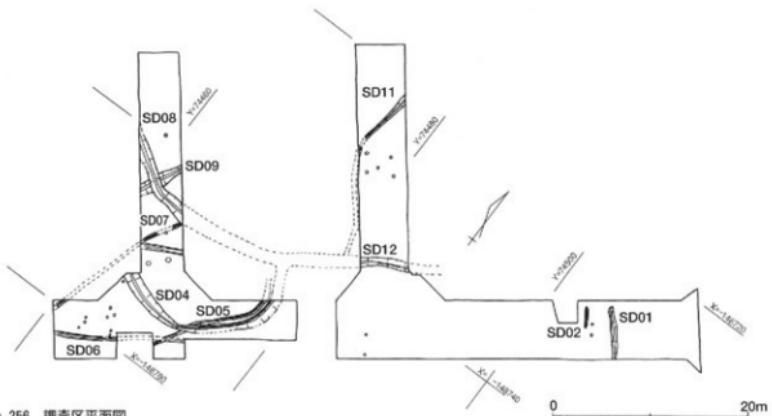


fig. 256 調査区平面図



fig. 257 1トレンチ西半全景



fig. 258 3トレンチ全景

みず かさ 32. 水笠遺跡 第2・3次調査

1. はじめに

水笠遺跡は、六甲山系西部南麓の新湊川と妙法寺川間の沖積地上に立地する。この付近は、住宅、商店、町工場、小規模なビル等が混在する地区であったが、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた。

水笠通周辺一帯は震災復興事業として区画整理が施工され、工事に先立ち試掘調査を実施した結果、遺跡の存在が明らかとなった。区画街路部分について実施した第1次調査では、弥生時代中期頃の溝やピットを確認し、遺跡の様相が徐々に明らかになりつつある。

今回、個人住宅の建築工事に先立って、2回の調査を実施した。以下、その概要である。



fig. 259
調査地位置図
1 : 2,500



fig. 260
調査地近景

第2次調査

1. 調査の概要 現地表標高は7.8m前後である。建築予定部分の全面、約53m²の発掘調査を実施した。

基本層序

瓦礫、コンクリートを主体とする整地土層の下層に、耕土（暗灰色粘性砂質土）、中世頃の耕土、床土（黄灰色粘性砂質土）が部分的に残り、その下層に弥生時代の土器を極く少量含む黒灰色粘性砂質土が局部的に薄く堆積する。現地表面から約30～40cm程度で、遺物包含層や遺構面を検出した。

検出遺構

S D01

検出長約7m、幅約1.6m、深さ約30cmで、北東から南西方向に流れる溝である。埋土は2層に分かれ、上層には黒色粘質土、下層には暗褐色粘性砂質土が堆積する。S D02と合流する付近から土器が若干出土した。

S D02

検出長約3.4m、幅約40cm、深さ約20cmの北西から南東方向に流れる断面形がU字形の溝である。建物の基礎によってかなり削平されているが、基礎底より深い部分が約5cm程度残存している。その付近から、磨製石包丁の破片が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、溝が2条確認した。これらの溝は、第1次調査で検出した溝とはほぼ接続することが判明した。

溝内から遺物の出土は極めて少ないとみ、溝が使用されていた時期の判断材料に乏しいが、少量の出土土器と石包丁から判断すれば、弥生時代の遺構と考えるのが妥当である。また、第1次調査において、弥生時代中期の土器が出土していることからもそれが追認されるものと考えられる。これらの溝の性格については、現在の段階では明らかでないが、当時の水田に導水するための溝あるいは、水はけを良くするための機能を有するものである可能性が考えられる。

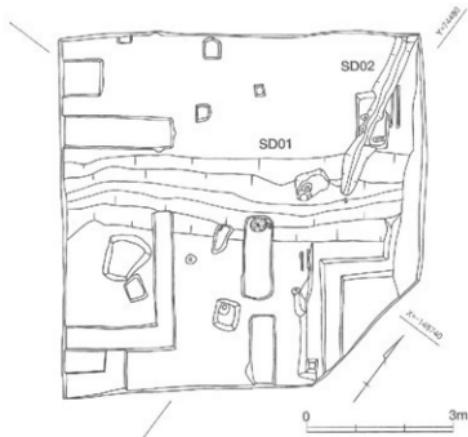


fig. 262 調査区全景

fig. 261 調査区平面図

第3次調査

1. 調査の概要 現地表の標高は7.8~8.1m前後である。建築予定部分の全面、約50m²について調査を実施した。

基本層序 現地表面以下の土層は、以下のとおりである。

- ①瓦礫混じり土（瓦礫、コンクリート）
- ②淡黒灰色～暗灰褐色粘性砂質土（近世から近代耕土）
- ③黄褐色混じり灰色粘性砂質土（近世頃の床土、耕土）
- ④黄灰色混じり灰色粘性砂質土（中世頃）
- ⑤暗褐色粘質土

（弥生時代の土器を極く少量含む、東端のみに薄く（厚さ2~3cm）遺存する）

現地表面から40~50cm程度で、遺構面基盤層である⑥褐色混じり黄灰褐色シルト上面を検出した。

検出遺構 ピット1基を東端部で検出した。

S P 01 直径約20cm、深さ約30cmを測り、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していないため、時期の詳細は明らかでない。



fig. 263
調査区西壁



fig. 264
調査区全景

2. まとめ 今回の調査では、ピットを1基確認した。これまでの調査で、弥生時代と判断される溝やピットを確認しており、今回のピットも同時期のものと考えられる。

これらの溝、ピットの機能は明らかでないが、遺構の分布状況や遺物の出土量からみて、調査地は集落縁辺部で、耕作地に近い場所にあたると判断するのが妥当であろう。

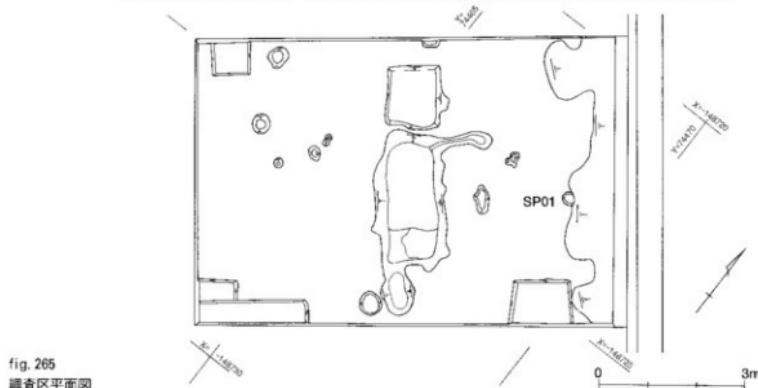


fig. 265
調査区平面図



fig. 266
調査区北壁
断面図

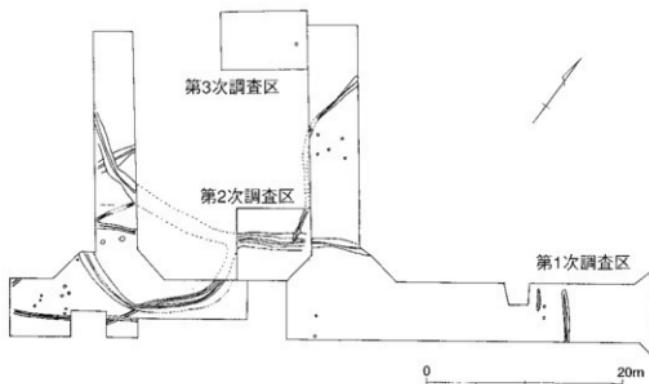


fig. 267
第1～3次
調査区平面図

33. 松野の遺跡 第6次-1~4調査

1. はじめに

松野遺跡は、妙法寺川と苅藻川に挟まれた、標高6~8mの緩扇状地性低地に立地している。これまでの調査では、古墳時代中期の豪族居館と考えられる柵列と建物を確認しており、またその南側からは竪穴住居を中心とした集落の様子が明らかになってきている。特に第3次-1・5次-1調査においては、滑石を加工・使用している状況が窺われる遺構を検出している。

今回の調査は、新長田駅南地区市街地再開発事業に伴って実施したものである。当調査については、既に平成12年度に『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』を刊行しており、本年報では調査の概要を示すに止めるため、詳細は報告書を参照されたい。

ただし、第6次調査地は日吉町2丁目と若松町2丁目の両地区にまたがっており、報告書では地区ごとの記述になっているが、本年報では、各調査地点ごとの記述としている。



fig. 268
調査位置図
1 : 2,500

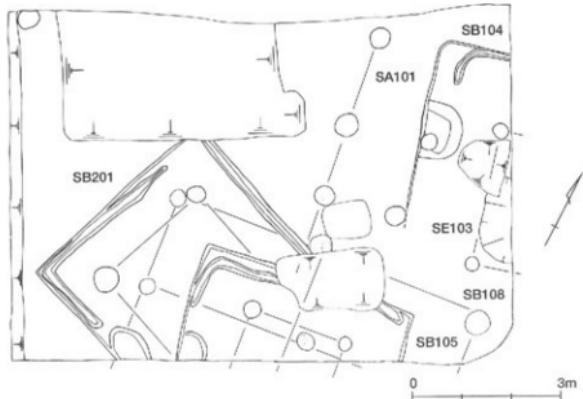


fig. 269
第6次-2
調査区平面図

2. 調査の概要

6次-1 古墳時代及び中世の遺物を含む黄灰色細砂シルト（遺物包含層）の下層で、遺構面基盤層である、淡灰褐色細砂シルト上面を検出した。

溝3条、土坑1基、ピット数基などを検出した。このうち、溝2条と土坑1基は古墳時代中期のものである。

6次-2 竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、柵列1条、井戸1基などを検出した。

竪穴住居は、いずれも古墳時代（5世紀後半）のもので、そのうちの3棟は第5次-1調査で検出したものと同一の遺構である。

掘立柱建物は12世紀後半頃のものと考えられる。

6次-3 溝3条、井戸1基、ピット1基を検出した。

溝のうち最も規模の大きいものは古墳時代後期のもので、井戸は13世紀頃のものである。

6次-4 新長田駅南再開発事業日吉2地区の西南隅部の調査で、日吉2地区内の最終の発掘調査にあたる。

ピット1基を検出した。遺構面は西南方向にやや下がっていくようである。

3. まとめ 今回の調査では、古墳時代の竪穴住居・溝、12世紀後半の掘立柱建物、13世紀の井戸などの遺構を検出した。同様な遺構は、周辺地で実施した調査でも確認しており、有機的なつながりが認められる。詳細については、報告書を参照されたい。

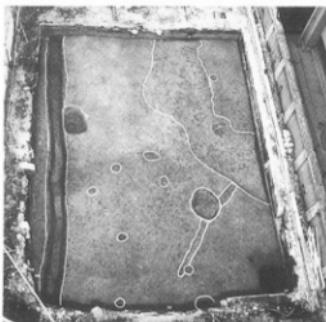


fig. 270
第6次-1
調査区全景

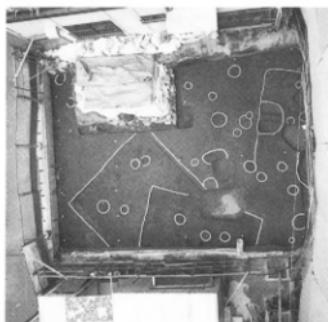


fig. 271
第6次-2
調査区全景

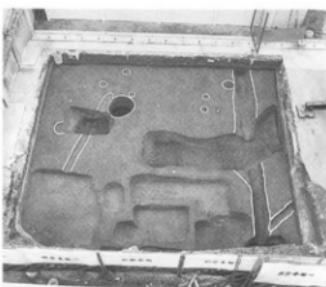


fig. 272
第6次-3
調査区全景



fig. 273
第6次-4
調査区全景

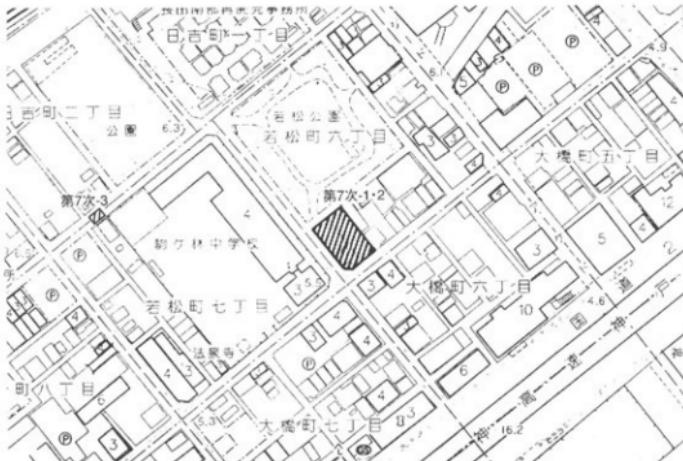
34. 松野の遺跡 第7次-1~3調査

1. はじめに

松野遺跡は六甲山南麓の標高6~7m付近に位置する。これまでの調査では、古墳時代中期の豪族居館と考えられる柵列と建物を確認しており、またその南側からは竪穴住居を中心とした集落の様子が明らかになってきている。特に第3次-1・5次-1調査においては、滑石を加工・使用している状況が窺われる遺構が検出した。また中世の住居址・井戸を古墳時代と同一面で確認している。

今回の調査は、新長田駅南地区市街地再開発事業に伴って実施したものである。当調査については、既に平成12年度に『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』を刊行しており、本年報では調査の概要を示すに止めるため、詳細は報告書を参照していただきたい。

ただし、第7次調査地は若松町6丁目と7丁目にまたがっており、報告書では地区ごとの記述になっているが、本年報では、各調査地点ごとに記述する。



7次-3

当調査地を挟んで、北側の第5次-1・2調査地と南側の第6次-1調査地において、幅2m前後、深さ0.2m程度の溝状遺構を検出しており、この遺構の連続性と位置を確認するため、調査を実施した。

調査の結果、上記の溝状遺構が検出した。幅2.4m、深さ0.2mで、遺構内から少量の土師器・須恵器が出土した。しかしながら南側に位置する第6次-1調査地から北へ延びると考えられた、幅0.5m前後、深さ0.3m程度の溝状遺構は当調査区内では存在せず、東西道路の南半で終わるか西方向に曲がって延びていくものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代から中世にわたる各時期の遺構を検出した。これらの遺構については、周辺地において実施した調査で検出した遺構と有機的な関係が認められる。詳細については、報告書を参照されたい。

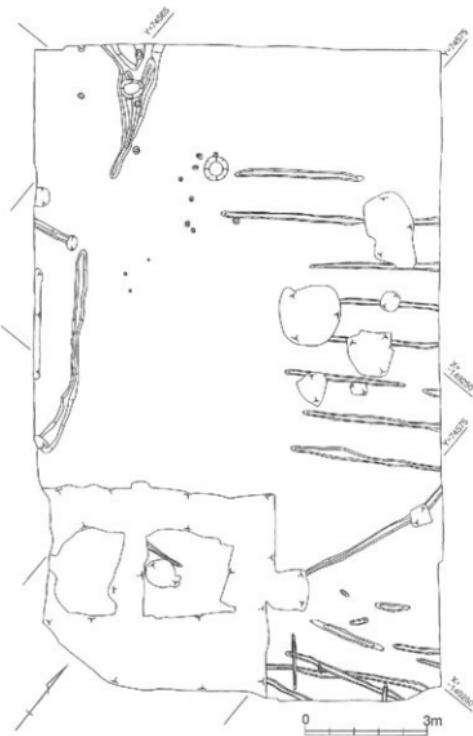


fig. 275 第7次-1・2調査区平面図

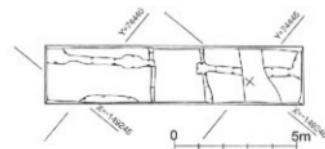


fig. 276 第7次-3調査区平面図



fig. 277 第7次-1調査区全景



fig. 278 第7次-2調査区全景

35. 松野遺跡 第10次-1~20調査

1. はじめに

松野遺跡は、昭和56年度に市営松野住宅建設事業に先立つ試掘調査で発見された遺跡で、六甲山系西端付近の南側に広がる沖積地の微高地に立地する。

今回の調査対象地は、長田区松野通4丁目の北半にあたり、古墳時代後期前半の豪族居館を確認した第1～3次調査地の北側に位置している。両者の間には東西方向の道路が存在し、この道路以北については、從来遺跡の広がりが明確ではなかった。このため、今回の区画整理事業に先立ち試掘調査を実施した結果、松野通4丁目北地区においても遺跡の広がりを確認したことから、発掘調査を実施した。

今回の調査は、区画街路部分について実施したものであるが、調査は実施可能な地区から順次実施し、調査地区ごとに調査次数に枝番を付している。

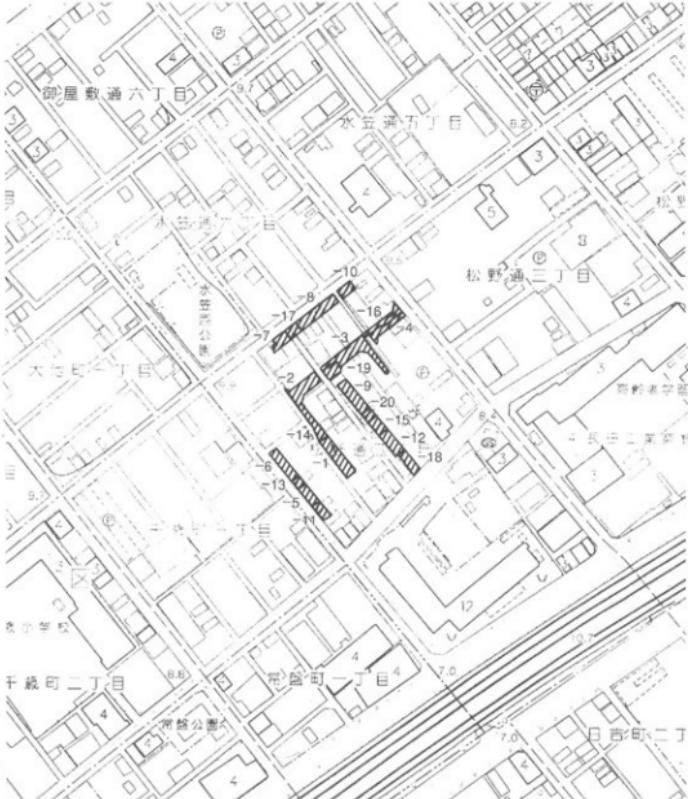
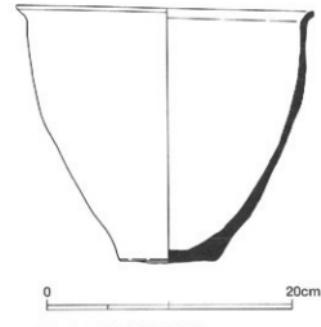


fig. 279
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 現地表面から遺構面までの深さが浅いため、既存建造物の基礎や地下施設の影響を大きく受けしており、全体的に遺構面の遺存状況が悪い。
- 基本層序 各調査地区の層序については、若干の違いがあるが、概ね以下のように捉えられる。現地表以下の土層は、近現代の整地土、都市化直前の耕土・床土、旧耕土、遺物包含層、無遺物層と続く。調査時には遺物包含層と無遺物層を区別したが、遺物包含層から無遺物層へ徐々に変化して層界の不明な部分もある。遺物包含層の下面で遺構を検出した。
- 10次－1 土坑3基、ピット30基を検出した。
土坑のうち、SK03は弥生時代前期のものであり、完形の甕が横位で出土した。そのほか、遺構面上から弥生時代前期頃の土器片が比較的まとまって出土している。
- 10次－2 南半部で土坑4基を検出した。北半部は攪乱により遺構面は全く残存していないかった。
- 10次－3 掘立柱列1条、溝3条、土坑1基、落込1基の他、ピットを8基検出した。
掘立柱列は中世頃のもので、調査区の北東端で検出したために詳細な規模が不明であるため、調査時においては掘立柱列として認識したが、平成12年度に隣接地において調査を実施した結果、掘立柱建物の一部であることが判明した。
- 調査区の南東端で検出した土坑（SK01）は、遺物が全く出土していないため時期は不明であるが、弥生時代後期の遺構面より下層で検出し、第10次－1調査で弥生時代前期の土坑を確認していることから、弥生時代前期の遺構の可能性が考えられる。



fig. 281 第10次－1 調査区 SK03



- 10次-4 ピットを約20基検出した。一部については、第10次-3調査の掘立柱列と同一の掘立柱建物を構成することが、平成12年度に実施した隣接地における調査の結果、判明した。
- 10次-5 溝1条、ピット1基を検出した。
- 10次-6 掘立柱建物1棟、溝3条、土坑1基、ピット17基を検出した。
- 10次-7 掘立柱建物は、調査区内で東西2間、南北2間分を検出した。遺物は出土していない。
- 10次-8 掘立柱建物1棟、ピット2基を検出した。
- 10次-9 植立柱建物は、調査区内で、東西1間分(3.0m)、南北1間分(1.3m)を検出した。柱穴掘形の埋土に都市化直前の耕土が含まれるため、比較的新しい掘立柱建物である。
- 10次-10 既存の建造物の基礎や埋設管・地下施設のため遺構面の遺存状況が特に悪い。土坑1基、ピット8基を検出した。
- 土坑は、西寄北壁直下で検出した。深さは1mである。遺物が全く出土しなかったため時期は不明であるが、層序や埋土から見て近世頃の耕作地の水溜と考えられる。
- 10次-9 調査区の南部に存在する現況の側溝の保護のため、この側溝を挟む形で、調査区を2分して調査を実施した。
- 南部では遺物包含層・遺構ともに検出されなかった。北部では北側約2/3において、遺物包含層を確認したが、遺構は検出していない。
- 10次-10 調査区の東部で、遺物包含層をわずかに検出したが、全体的に擾乱が激しく、遺構は検出していない。

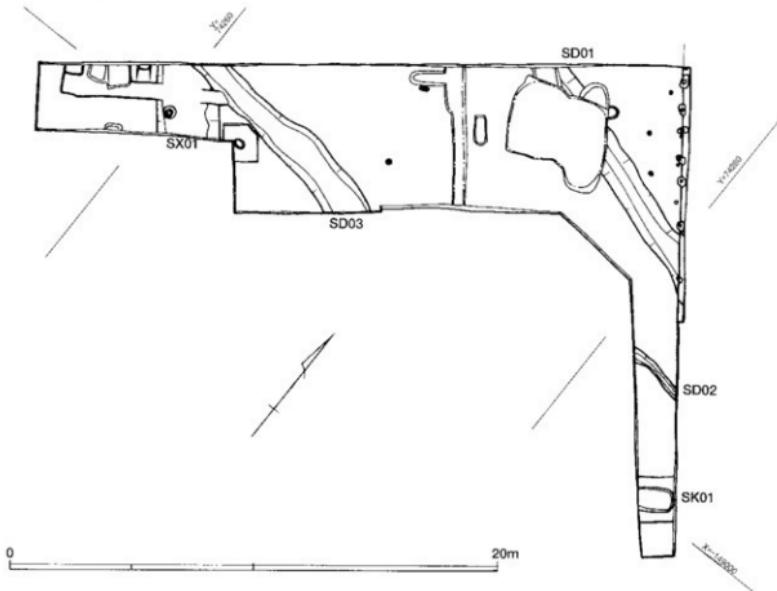


fig. 283 第10次-3調査区平面図

10次-11

溝6条、不定形の土坑状の落ち込み1基、ピット約20基を検出した。

溝のうち、南側 $2/3$ で検出した5条(SD01~05)は、調査区内を北東から南西方向に約1.3m間隔で並行に走るもので、内部に鋤痕と考えられる小穴が多数検出した。検出状況から、畑の畦と畦の間の鋤溝と考えられる。

出土した土器は細片が多く、詳細な時期については不明であるが、概ね古墳時代のものと考えられるため、各遺構についても古墳時代のものと考えられる。上記の鋤溝ともう1条の溝(SD06)は方向が異なっており、時期差も考えられるが、出土土器に顕著な違いは認められない。今後の整理作業の進展を待って更に検討を加たい。

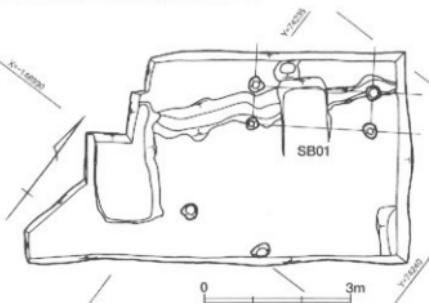
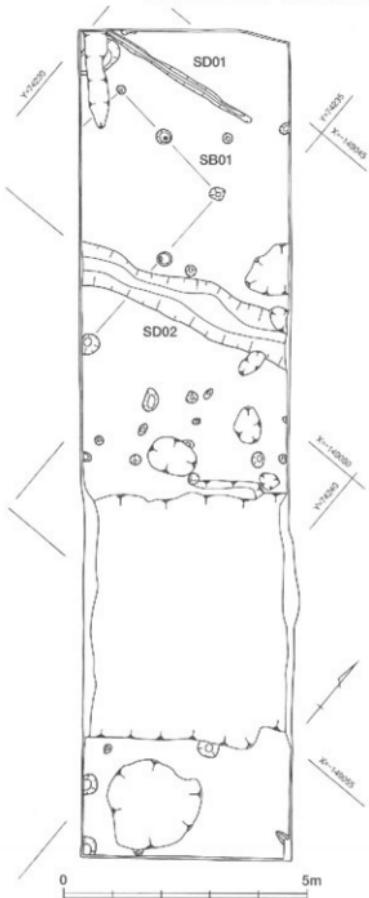


Fig. 286 第10次- 6 調査区全景

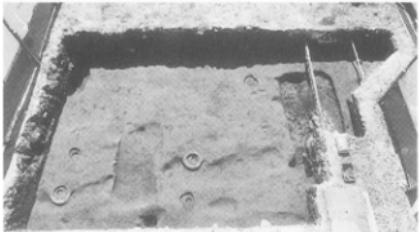


Fig. 287 第10次- 7 調査区全景

- 10次-12 溝2条、落ち込み1基、ピット数基を検出した。
- S D01 調査区北東部で検出した、幅57~62cm、深さ12cmの溝で、北西から南東方向に流れる。遺物は出土していない。
- S D02 調査区南西部で検出した、幅48~80cm、深さ9cmの溝で、やや北西から南東方向に流れ。弥生土器の小片が出土している。
- S X01 調査区北西部で検出した、最大幅1.9m、長さ4.82m、深さ15cmを測る、平面形が長楕円形の落ち込みである。

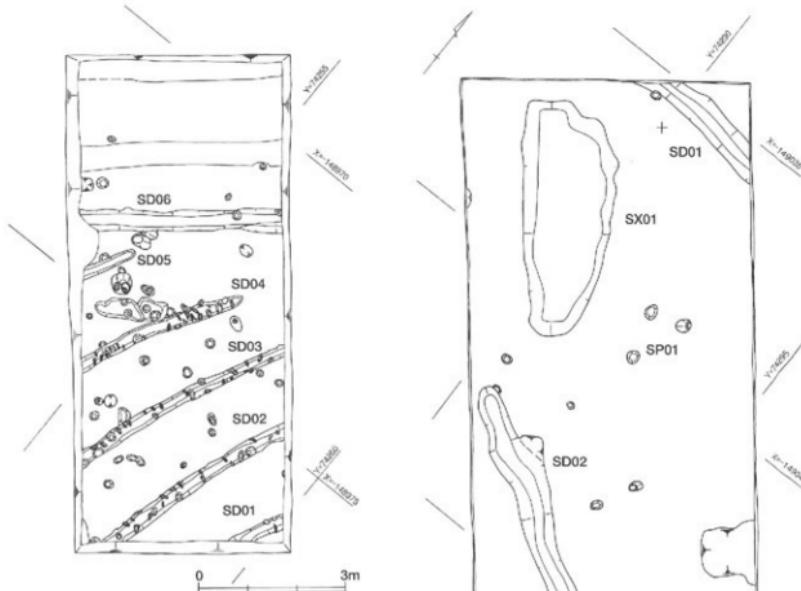


fig. 288 第10次-11調査区平面図



fig. 289 第10次-11調査区全景

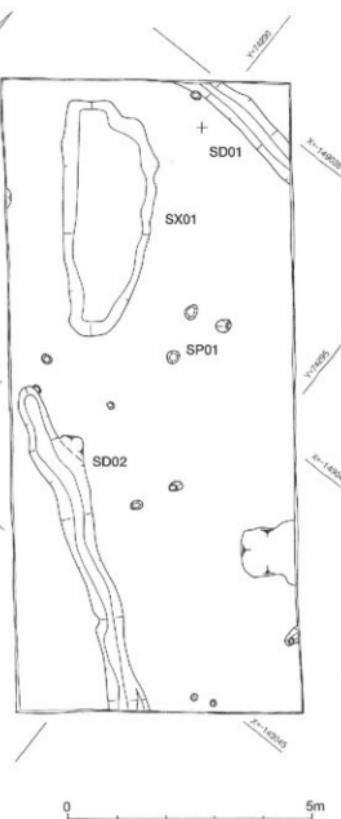


fig. 290 第10次-12調査区平面図

- 10次-13 弥生時代後期の土坑1基、時期不明のピット数基を検出した。
 土坑（SK01）からは、弥生時代後期の土器がまとめて出土している。南半部分では細片が少量出土したのみであるが、北半部では壺や甕が潰れた状態で出土しており器形の復元が可能である。
- 10次-14 溝1条を検出した。溝は、弥生時代と考えられる土器片が出土している。
- 10次-15 ピット1基、溝1条を検出した。
 溝（SD01）は、幅は約1.4m、深さ0.25mを測る。弥生時代と考えられる土器片が出土している。この溝は、第10次-12調査区から続くもので、第10次-14調査区で検出されている溝まで延びる可能性の高いものである。
- 10次-16 ピット40基を検出した。ピットのなかには深さは60cmを測るものもある。断面の観察から、柱の接ぎ変えが行われた痕跡が認められ、一定期間建物が存続していたと考えられる。
 東側の旧耕土層が一段深くなっている部分では、ピットの密度が粗く、基本的には屋敷地外にあたる可能性が高いものと考えられる。
 想定される建物は、12世紀後半から13世紀末までの間に建てられ存続していたと考えられるが、詳細については、今後整理作業の進展とともに考察したい。
- 10次-17 近世のものと考えられる埋桶が1基検出されている。しかし、他の遺構は存在しない。
- 10次-18 小規模なピットとピット状の窪みが数基検出されたが、遺構からの遺物の出土がほとんどなく、その時期は不明である。
- 10次-19 ピット、溝状遺構、落ち込み状遺構が検出されたが、埋土からの遺物の出土がほとんどなく、その時期は特定できない。
- 10次-20 鋤溝3条を検出した。番号からは古墳時代の遺構と考えられる。出土遺物は遺構面検出の際に出土した中世の須恵器碗片1点のみであった。

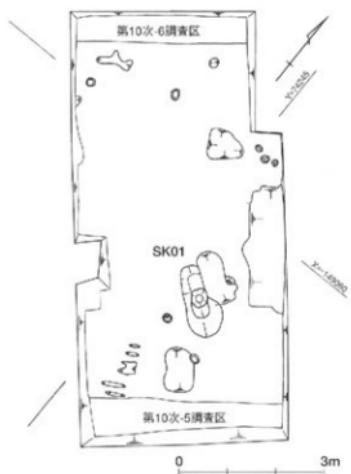


fig. 292 第10次-13調査区 SK01

fig. 291 第10次-13調査区平面図

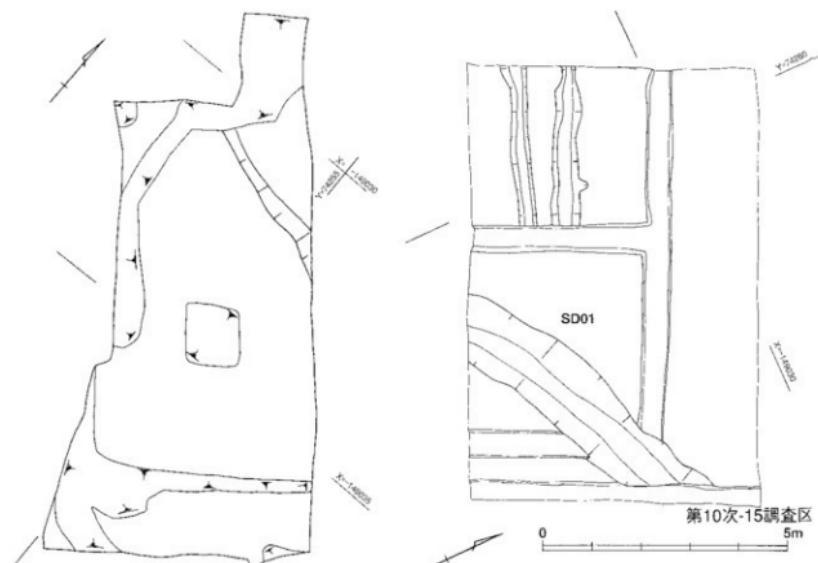


fig. 293 第10次-14・15調査区平面図 第10次-14調査区

3. まとめ 今回の調査は、古墳時代後期前半の豪族居館跡を検出した、第1~3調査地より北側において初めて実施した調査である。各調査区によって遺構・遺物に粗がみられたが、松野遺跡の内容を考える上で、いくつかの貴重な成果を得た。

第10次-1・12調査では、弥生時代前期の遺物が遺構内から出土している。このうち、第10次-1調査 S K03では完形の甕が出土しており、明確に弥生時代前期の遺構と捉えられる。全体的な遺構の密度は粗いものの、当該期の集落の様相の一端を示している。

また、第10次-13調査検出の土坑 S K01からは、弥生時代後期の土器がまとめて出土した。当該期の遺構は第1~3次調査地内にもみられるが、その他の調査区ではあまり検出しておらず、第10次-3調査 S D01などで確認しているのみである。当該期の遺構の分布は現段階では散発的であるが、付近に当該期の居住域が存在する可能性は高いといえる。

また、第10次-11調査では5条の並走する溝を検出したが、これらの溝は畑の鋤溝と考えられる。出土した土器は細片で少量のため時期決定は難しいが、古墳時代の可能性が考えられ、その場合豪族居館跡との関連が注目される。居館の主軸方向と今回の鋤溝の主軸方向とは若干異なり、直接的な関連の可能性は低いが、詳細は整理作業の進展を待ちたい。

鋤溝は、第10次-20調査でも3条検出した。検出した鋤溝が古墳時代と確定できる材料は乏しく、今後の検討作業が必要であるが、古墳時代の遺構と考えた場合、鋤溝方向は現在の町割り方位と一致しており、現在の町割り方位が排水などの諸条件と一致して、早い時期から合理的なものと考えられていたのかどうかが問題となるであろう。

今回の調査については、調査開始前には豪族居館より北側の施設あるいは北側を区画する施設の存在などが想定されていた。しかし、調査の結果豪族居館の時期と明確に同一時期といえる遺構は確認されなかった。古墳時代のものと考えらえる鋤溝を数条検出しており、この遺構の位置付けが今後の課題である。調査全体的にみても、遺構密度は希薄で、北側の調査区になるほどその傾向は強い。現地表面から遺構面までの深さが浅いため、後世の削平によって消滅した可能性もあるが、元来遺構分布が少なかったと考えられる。

そのほかの時期の遺構として、弥生時代前期、弥生時代後期、中世の3時期の遺構を検出した。弥生時代前期の遺物は第1次調査に先立つ試掘調査においても確認しているが、遺構を検出したのは初めてである。周辺に当該期の未知の集落が存在する可能性がある。

以上の成果を踏まえて、今後松野遺跡の様相についてさらに検討を加える必要がある。

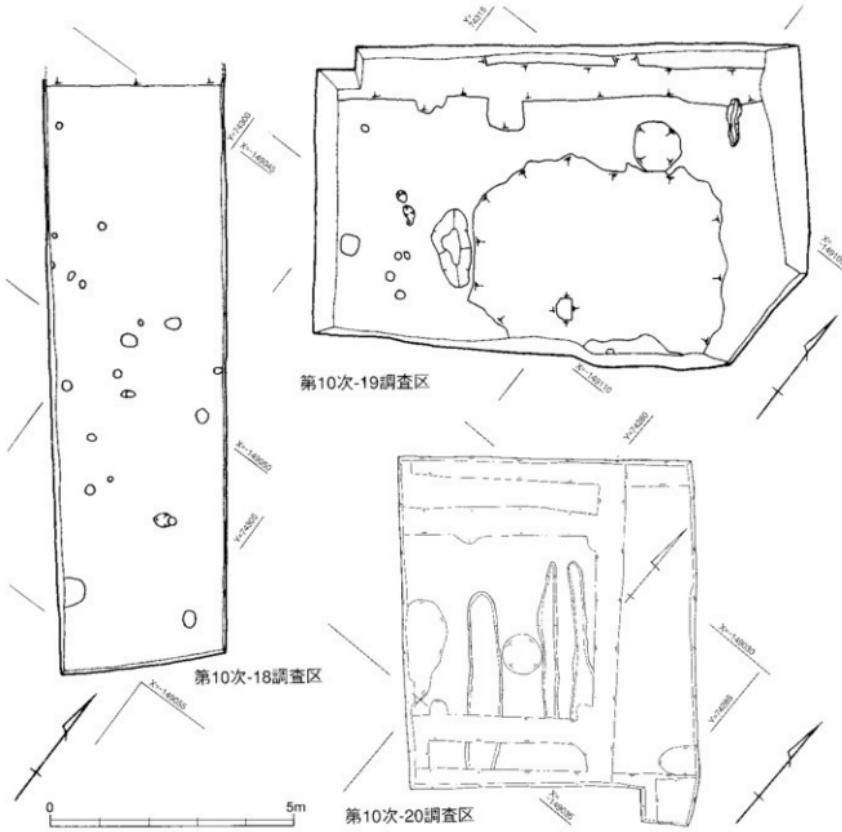


fig. 294 第10次-18~20調査区平面図

まつ の 36. 松野遺跡 第11～16次調査

1. はじめに

松野遺跡は、妙法寺川と苅藻川に挟まれて形成された緩扁状地性低地に立地する。遺構面の標高は約6～8mである。

これまでの調査では、古墳時代後期初めの濠と柵に囲まれた豪族の居館跡（第1・2次調査）や、これに付随すると考えられる掘立柱建物や竪穴住居などを確認している。また、一部の地点では弥生時代後期の遺構や鎌倉時代前半の掘立柱建物なども確認している。

今回の調査は、松野通4丁目地区内において、個人住宅及び工場建設に伴って実施したものである。

以下、その概要である。



fig.295

調査地位図

1:2,500

第 11 次 調 査

1. 調査の概要 遺構面は乳黄色系のシルト混じり極細砂で、西から東に向かってわずかな傾斜面となっている。工事影響範囲について、工事影響深度（現地表下1.1m）まで実施した。

検出遺構 遺構は調査区の西半を中心に確認でき、溝状遺構3条、ピット5基を検出した。

SD01 北西から南東に向けて走る溝状遺構で、幅1m前後、最大の深さ10cmである。埋土は暗褐色細砂質シルトを主とするが、溝底には灰色極細砂が薄く堆積している。

SD02 SD01とほぼ平行して走る溝状遺構で、幅50cm前後、最大の深さ20cmである。埋土は暗褐色細砂混じりシルトである。

SD03 SD01・02と直交して両遺構を切る溝状遺構で、最大幅30cm、最大の深さ8cmである。埋土は暗褐色シルト質細砂である。

ピット いずれも暗褐色系の埋土であるが、柱穴と認定できるものはない。

出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器がある。その量は概して少なく、何れもが遺構の上面あるいは遺構埋土から出土したものである。SD01～03では、何れも平安時代末から鎌倉時代初めの土師器、須恵器、瓦器が出土している。

なお、工事掘削深度である現地表下1.1mまで、遺構面以下について断ち割り調査を実施したが、埋蔵文化財は確認されていない。

2. ま と め 今回の調査区は古墳時代後期初めの豪族居館とされる遺構の確認された第1・2次調査地に隣接する地区であったが、古墳時代後期の遺構は全く確認できず、鎌倉時代初めの溝状遺構を確認できたに止まる。第1～3調査においても豪族居館を取り巻く柵列と濠の西侧では顕著な遺構が確認していないことから、同様に古墳時代後期初めの遺構が顕著ではない地点と考えられる。

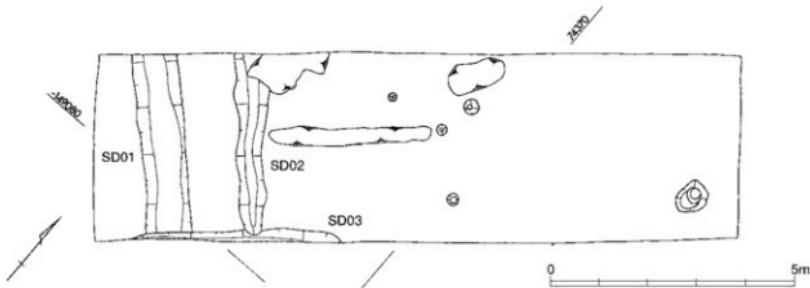


fig. 296 調査区平面図

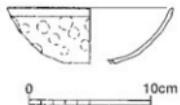


fig. 297 SD03出土遺物実測図

第 12 次 調 査

1. 調査の概要 新築される建物の基礎部分に限定して、工事影響深度まで調査を実施した。影響深度は、基礎部分は現地表下90cm、梁部分は現地表下50cmまでである。

基本層序 現地表面から30~40cmまでは盛土で、その下層に希薄な耕土・旧耕土が堆積し、これらを除去した段階で遺物包含層である黒灰色シルトが検出した。調査区の3/4は遺物包含層の上面、または途中で調査が終了している。

旧耕土と遺物包含層の間からは須恵器・土師器が出土しているが、遺物包含層からは土師器片のみ出土している。第10次調査結果を踏まえると、概ね弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物包含層と考えられる。

基礎部分と梁の一部で遺構面基盤層を検出したが、遺構は確認していない。

2. ま と め 今回の調査は、大半の部分が遺物包含層上面を検出したに止まり、遺構面の検出に至らなかったため、当調査区の状況は不明である。遺構を確認しておらず、遺物包含層からも須恵器が1点も出土しなかったことから、第10次調査と同様に古墳時代中期頃の遺構が存在しないものと考えられる。

fig. 298
調査区平面図

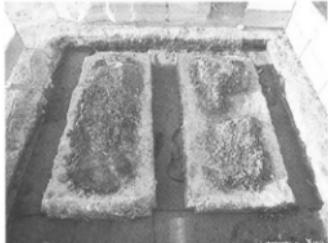
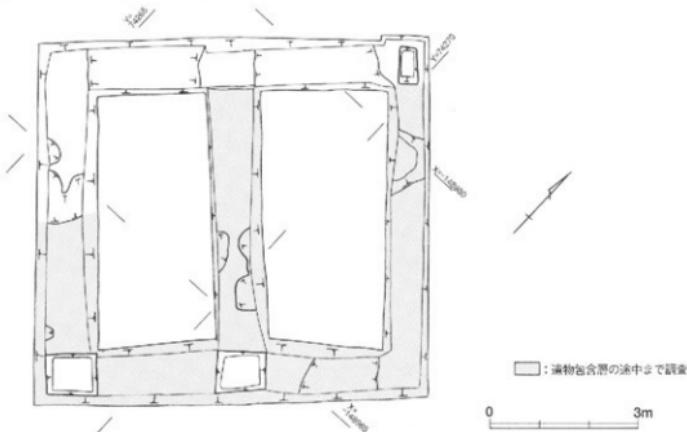


fig. 299 調査区全景



fig. 300 調査区南壁

第 13 次 調 査

1. 調査の概要 住宅建設の設計図に基づき、工事によって影響を受ける、基礎および基礎杭部分について調査を実施した。調査区は、基礎の形状が「日」字形である。

基本層序 現地表下の土層は、上層より、旧耕土および現代盛土、淡灰色泥砂、黄灰色砂泥、褐色泥砂（古墳時代遺物包含層）、淡黄褐色砂泥（古墳時代遺構面基盤層）である。

淡灰色泥砂、黄灰色砂泥層から微量の中世の土師器・須恵器が出土した。遺物包含層からも微量の古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

検出遺構 調査区北東部で古墳時代包含層に切り込んだ、直径0.3m、深さ0.2mのピットと径0.6m、深さ0.2mの落ち込み状遺構を検出した。微量の遺物と層位から鎌倉時代頃の遺構と考えられる。

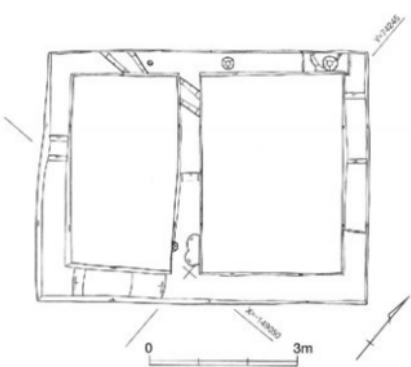
同じく調査区北辺では、直径0.2m、深さ0.2mのピットと幅0.5m、深さ0.2mの溝状遺構を検出した。層位から古墳時代の遺構と判断される。

調査区西辺から南東部にかけては攪乱坑である。中央部は、北辺から連続すると考えられる溝状遺構と南へ僅かに下がる地形を検出した。東辺は攪乱坑と近世の井戸と考えられる遺構を検出した。

2. ま と め わずかな面積の調査区であるが、比較的良好に遺構面が遺存していた。また今回、鎌倉時代の遺構を確認したことから、今後の調査においても遺跡が良好に残る地区については、中世の遺構面も存在することが十分考えられるようになった。

また北辺から中央部で検出した溝状遺構からの出土遺物はなかった。しかし遺構内堆積土が他の遺構とは異なり砂礫を多く含むものであった。周辺の調査地区やJRを挟んだ南側の調査地では、これと同様の堆積土内から弥生時代前期の遺物が検出されていることから、弥生時代の遺構の可能性も考えられるところである。

現状の点的な調査成果を整合させることによって、今後遺跡の性格などが明らかになると考えられる。



第 14 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査範囲は、南北6m、東西8mの調査区である。北半部には、旧耕土の下層で遺物包含層を確認したが、東半については、旧耕土によって遺物包含層及び遺構面の上部が削平されていた。

検出遺構 ピット15基を検出した。ピットの探さは様々であるが、深さ60cmを測るものもある。柱穴の断面観察から、柱の接ぎ変えが行われた痕跡が認められ、ある一定期間建物が存続していたと考えられる。また柱穴の配置状況から何度かの建替えが行われたと考えられる。

想定される建物は、12世紀後半から13世紀末までの間に建てられ存続していたと考えられるが、詳細については、周辺の調査成果を踏まえて検討を加えたい。

2. ま と め 今回の調査は、今年度から行われている区画整理事業に基づく個人住宅建設に伴う発掘調査の一部であり、現在松野遺跡の範囲に含まれてはいるものの、従来その詳細な内容については明らかでなかった地区である。今回の調査において中世段階における集落の一端が明らかとなった。

松野遺跡は古墳時代の居館跡として著名であるが、その周辺の状況については、不明な点が多くかった。近年の調査においては、居館の北側では古墳時代の遺構はほとんど認められず、飛鳥時代以降の耕作痕や中世の集落が検出されているのみである。

居館の北側には古墳時代の遺構が存在していないことが明確になれば、松野遺跡全体を考える上で重要な成果であり、大きな問題の提起となろう。

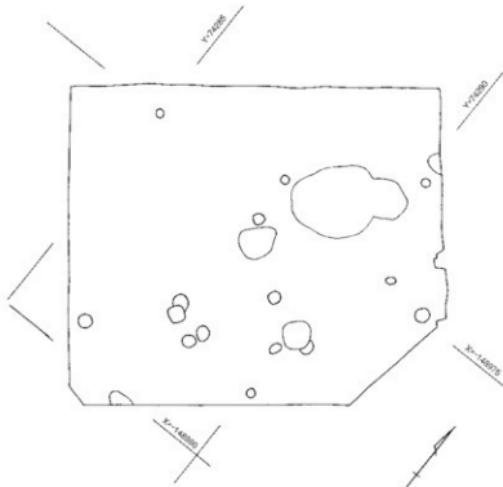
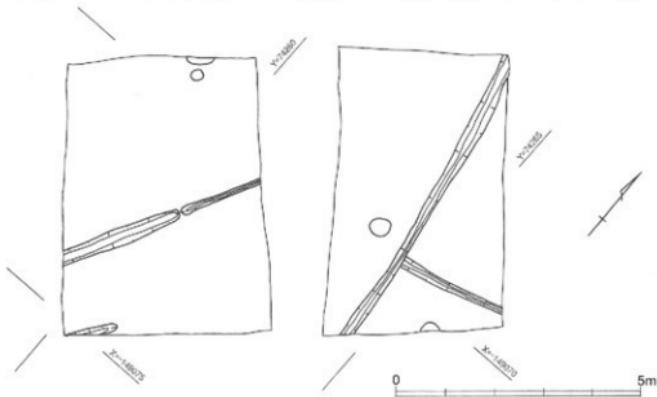


fig. 303
調査区平面図



第 15 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査対象面積は、約50m²である。
調査地は、居館遺構が検出された第1～3次調査地の北側に位置している。
- 検出遺構 溝 4 条、ピット 1 基を検出した。
- S D01 ほぼ南北方向に走る溝である。幅20cm～40cm、深さ10cm前後である。
- S D02 ほぼ東西方向に走る溝である。幅20cm～30cm、深さ10cm前後である。
- S D03 ほぼ北東から南西方向に走る溝である。幅20cm～30cm、深さ10cm前後である。
- S D04 ほぼ北東から南西方向に走る溝である。幅20cm～30cm、深さ10cm前後である。
2. ま と め 今回検出した遺構は溝 4 条、ピット 1 基である。時期は遺物に乏しいため確定できない。
遺物包含層からは、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものが出土している。
今回の調査も含めて、居館遺構を検出した第1～3次調査地の北側では、ほとんど遺構を検出しておらず、空間地帯または生産域であった可能性が高いものと考えられる。



第 16 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査対象面積は100m²である。

今回の調査地は、第1~3次調査地の北側に位置し、居館遺構に隣接する部分にあたるものである。

検出遺構 溝1条、ビット数基を検出した。

S D01 緩く円弧を描くが、ほぼ南北方向に走る溝である。幅20~40cm、深さ10cm前後である。この溝は、今回の調査地の南側に位置する、第15次調査地でも検出している。

ビット 南端で数基検出している。

2. ま と め 今回検出した遺構は溝1条、ビット数基である。時期は遺物に乏しいため確定できない。遺物包含層からは、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものが出土している。

今回の調査も含めて居館遺構の検出された第1~3次調査地北側では、遺構の密度が粗く、空間地帯または生産域であった可能性が高いものと考えられる。

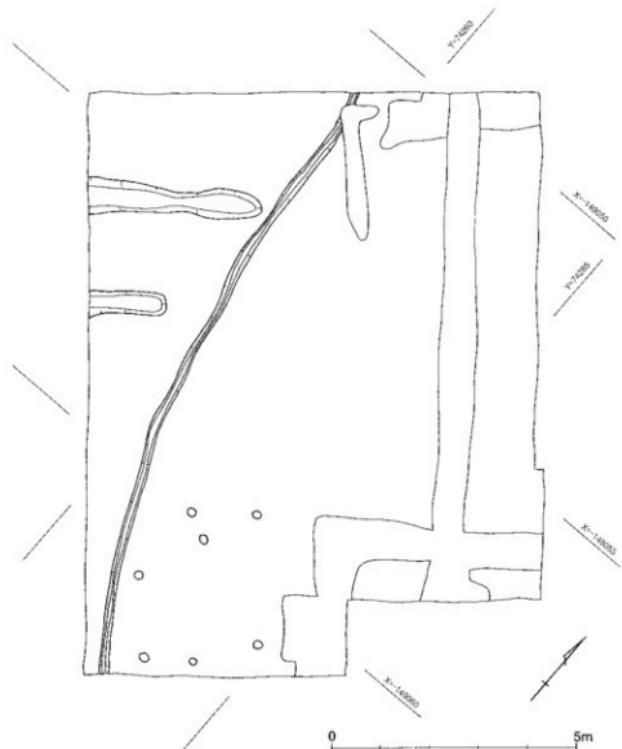
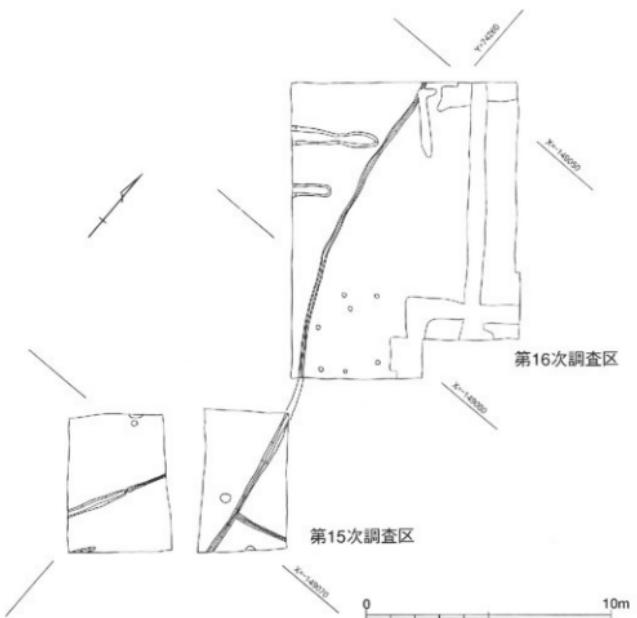


fig. 306
調査区平面図



ふたばちょう 37. 二葉町遺跡 第9次-1~4調査

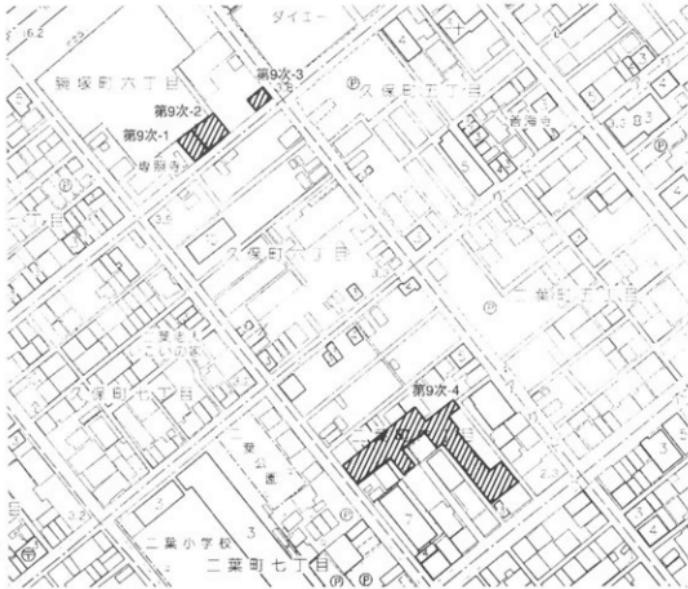
1. はじめに

二葉町遺跡は、神戸市長田区腕塚町5・6丁目、久保町5・6丁目、二葉町6丁目に所在し、新湊川（旧茹藪川）と妙法寺川に挟まれた海岸線に程近い沖積地に立地する。

二葉町遺跡については、平成9年度より震災復興市街地再開発事業に伴って、事業地区内において順次発掘調査を実施してきている。これまでの調査の結果、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の掘立柱建物や井戸、墓等を確認しており、中世前期を中心とした時代の集落跡であることが判っている。

今回の調査は、腕塚町6丁目工区（第9-1~3次調査）と二葉町6丁目工区（第9-4次調査）について実施した。

今回の調査については、既に平成12年度に『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』を刊行しており、詳細は報告書を参照されたい。本年報では調査の概要のみ示すこととする。



2. 調査の概要

腕塚町6丁目における基本層序を第9次-1調査における層序をもって代表させると以下のようにになる。

9次-1
基本層序 現地表面以下の土層は、盛土、耕土、灰褐色粗砂（洪れ砂）、黄灰色粗砂～シルト質極細砂（中世舗床）、暗灰褐色粘質粗砂～中砂（鎌倉時代頃の遺構面）、灰黄色粗砂混じり極細砂（地山）となっている。地表面から遺構面までは約60cmである。

- 検出遺構** 井戸 1基、ピット 2基、鋤溝 2条を検出した。
各遺構からは時期を特定できるような遺物が出土していない。しかしその直上層から、鎌倉時代頃の土器片が出土しているため、遺構の時期もほぼ同様と考えている。ただし鋤溝は遺構面よりも 1 層上から掘り込まれているため、時期が若干下るようである。
- SE302** 直径 1.6m、深さ 0.7m 程度の規模をもつ素掘りの井戸である。シルトと砂が交互に堆積した状況を観察した。この井戸は湧水が激しい上に砂層に掘削されているため、壁面の崩落が激しかった。おそらく耕作時の使用される水汲み場であったと考えられる。
- 9次-2** 遺物包含層である黒褐色粘質シルトから出土した土器は少量であったが、その中に弥生土器の破片を数点確認した。遺構面の基盤層は西側は細砂～中砂、東側はシルトによって形成されている。
- 検出遺構** 溝 2条、ピット数基を検出した。
- SD101** 調査区を南北に貫くこの溝は、広い部分で幅 0.5m、深さ 30cm で、弥生土器が若干含まれていた。
SD101 の西側でもう 1 条同じ方向に流れる溝を検出しているが、中世の遺物が出土していることなどから、SD101 と同時期に存在する遺構ではない。
- 9次-3** 今回の調査地は、既存建物の基礎工事の際に現地表下 1.7m まで掘削されていたため、第 9-1・2 次調査で検出した遺構面は存在しなかった。既存建物の基礎以下の層については、旧地表面にあたる土壤化層は確認したが遺物・遺構は検出されず、中世以前の生活面は存在しないものと思われる。
- 9次-4** 調査区は大きく分けて 2箇所にわたり、東側の南北に長い調査区を I 区、西側の東西に長い調査区を II 区として調査を行った。

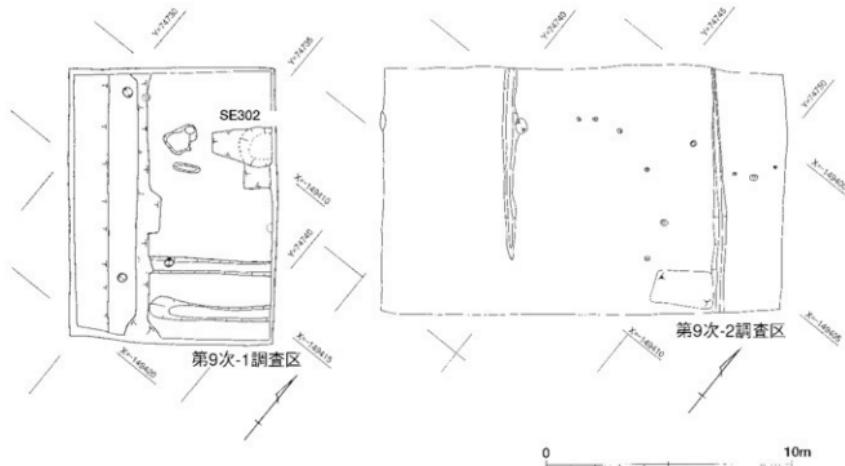


fig. 310 第9次-1・2調査区平面図

検出遺構 挖立柱建物3棟、土坑4基、溝36条、井戸1基、木棺墓1基、柵列1条、落ち込み5基、ピット多数を検出した。

S B311 II区で検出した掘立柱建物で、調査区内で検出した規模は東西3間×南北1間であったが、北側隣接地で実施した第12次-1調査の結果、東西3間×南北3間の規模をもつ総柱の建物であることが判明している。柱間から判断すると、東側の柱列は庇と考えられる。南北方向の軸は、N33°Wを測る。

S B312 II区で検出した掘立柱建物で、東西3間×南北2間の規模をもつ総柱の建物である。東側隣接地の調査ではこの建物を構成する柱穴は確認していないため、上記の規模が確定している。南北方向の軸は、N32°50'Wを測る。

S B311とS B312は、方向を同じくしており、同時期に存在した建物と考えられる。

S B313 II区で検出した掘立柱建物で、調査区内で検出した規模は東西2間×南北2間であったが、東側隣接地で実施した第8次-3調査の結果を合わせると、東西3間×南北2間の規模をもつ総柱の建物であることが判明している。南北方向の軸は、N35°50'Wを測る。南東側の4本の柱は、建て替えがみられる。13世紀前半の建物と考えられる。

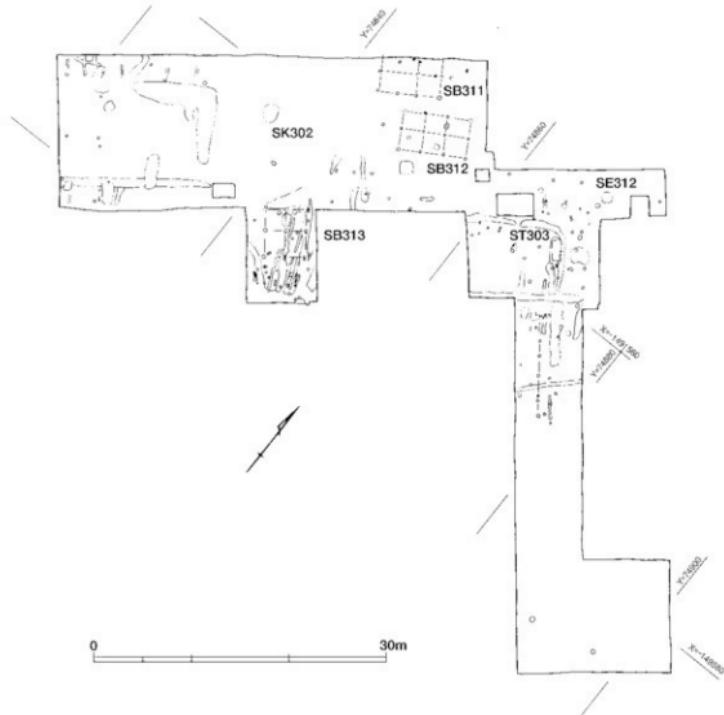


fig. 311 第9次-4調査区平面図



fig. 312 S E 212



fig. 313 S T 303

S E 312 I区で検出した井戸である。擾乱により上半の大部分が削られているが、一辺1.1mの隅丸方形の掘形で、深さ55cmを測る。井側材が無く、またその痕跡も無かったため素掘りの井戸と考えられる。底の中央に直径40cm、深さ15cmの円形の穴をあけ、曲物を1段据えて水溜めとしている。内部より井戸を埋める際の祭祀に使用された土器などが出土している。13世紀初頭から前半の遺構と考えられる。

S T 303 I区で検出した木棺墓である。掘形は長辺2.7m、短辺1.1m、木棺は長辺2.1m、短辺0.9mを測る。木棺内には人骨の痕跡が残っており、頭部は北と考えられる。木棺内の副葬品としては、頭部西側には土師器の大皿1点と刀子と思われる鉄製品が1点、頭部東側には器種不明の漆製品が置かれていた。頭部付近のこれらの副葬品は棺底から出土しており、棺内に副葬されたものと考えられる。13世紀前半の遺構と考えられる。

以上の遺構からは、井戸と木棺墓を除いて遺物の出土が非常に少なく、時期の確定は難しいが、井戸と木棺墓との他の遺構はほぼ同時期と考えられ、12世紀後半から13世紀前半の遺構と考えられる。

3. まとめ 今回の調査地は、腕塚町6丁目と二葉町6丁目に分かれている。

腕塚町6丁目における調査では、中世の溝と井戸、及び弥生時代の溝が検出した。この付近は、中世の段階では、居住区に隣接する水田として利用されていたと考えられる。

二葉町6丁目における調査では、これまでの調査同様、12世紀後半から13世紀前半にかけての掘立柱建物や井戸、木棺墓を検出しておらず、中世前期の集落の一部と考えられる。これまでの調査で見つかっている建物や井戸の配置を合わせると、当時の村落の景観が復元できる貴重な資料といえる。



fig. 314 調査区全景



fig. 315 調査区全景

わかまつちょう 38. 若松町遺跡 第3次調査

1. はじめに

若松町遺跡は、平成7年の阪神・淡路大震災以降に若松町11丁目民間区画整理事業に伴う試掘調査により、はじめて発見された遺跡である。

これまでに実施した調査では、弥生時代後期の耕作痕、庄内期の集落、中世の墓などを確認している。

今回の調査地は、第2次調査地の南に隣接しており、遺跡の続きが存在することが予想されたため、個人住宅建設に伴う発掘調査を実施した。

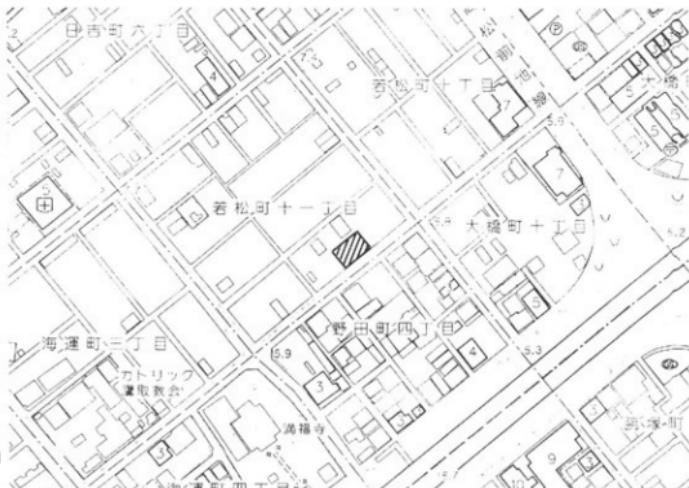


fig. 316
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

新築される建物の基礎部分のみの調査となったため、幅1~1.5mのトレーンチ調査区を設定して調査を実施した。便宜上、1~5区の小調査区を設定し調査を実施した。

基本層序

今回の調査地は、以前の建物基礎によるものと、基礎解体時における整地作業によって大きく搅乱を受けている。比較的良好な状態の部分における観察によれば、基本層序は、現地表下20cmまでが盛土、同60cmまでが淡褐色シルト質極細砂、同70cmまでが暗茶褐色粘性砂質土、同90cmで乳灰茶色粘性砂質土、同1.0mで遺構面の淡黄灰色粘性砂質土を検出した。その下層からは、黒灰色粘質土が搅乱の底で観察できた。

2~5区に関しては、今回の工事影響掘削深度まで遺構面が搅乱により失われていた。1区のみ、遺構面が残存していたが、南の道路に接する地区であり、埋設管などの搅乱が多くみられた。

検出遺構

直径約20cmのピット4個基を検出した。

ピットは、いずれも調査区の南端部で検出したが、掘立柱建物としてのまとめは認められない。

3. まとめ 今回の調査では、対象範囲のほとんどが攪乱により失われていたが、南端の1区において遺構面を確認することができた。出土遺物が少量かつ小破片であったため、明確な時期の特定は困難であるが、須恵器の破片が出土していることから、第2次調査の結果を踏まえると、中世の集落域と推定される。

南端部において遺構を検出していることから、遺構の広がりはさらに南側の野田町4丁目にも及ぶものと考えられる。

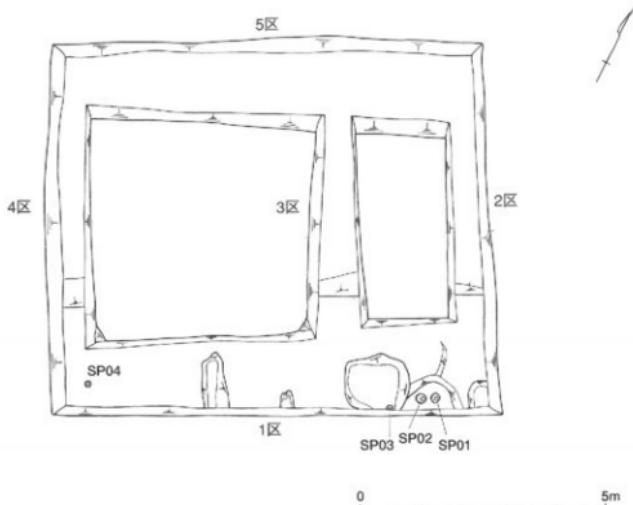


fig. 317
調査区平面図



fig. 318
調査区全景

えびすちょう 39. 戻町遺跡 第28次調査

1. はじめに

戻町遺跡は、縄文時代晚期から中世に至る集落や水田等の様々な遺構が確認されている遺跡である。なかでも、弥生時代から庄内式期の遺構・遺物を多く確認しており、西摂津の最西端に位置する拠点集落と考えられている。

今回の調査地点は、平成8年に遺跡の範囲が南側に拡がった地区に位置しているため、マンション建設事業に伴い試掘調査を実施した。その結果遺物包含層と遺構面を確認したため、建築工事の影響が及ぶ範囲を対象として発掘調査を実施した。

**2. 調査の概要**

新築される建物の基礎部分のみの調査であるため、幅1mのトレンチ調査区を設定して調査を行った。便宜上、1~6区の小地区を設定して調査を行った。

基本層序

以前の建物基礎によるものと、基礎解体時における整地作業により大きく擾乱を受けていた。比較的良好な状態の地点による基本層序は、現地表下40cmまでが盛土で、同70cmまでが中世から庄内期までの複数の耕土が存在すると考えられる。現地表下75cmで淡茶褐色粘質土の第1遺構面基盤層を検出し、同1.1mで乳白褐色粘性砂質土の第2遺構面基盤層を検出した。以下、乳青灰色シルト質極細砂、淡灰緑色シルト質極細砂、乳灰緑色極細砂シルトとなっているが、その下層については掘削不能のため確認できていない。

第1遺構面

3~5区に関しては影響深度まで擾乱により、ほとんど面を確認する事はできなかった。唯一遺構面が確認できた6区では、東西方向への底部に黄白色の粘土を貼った浅い溝とその周辺から稲株と思われる痕跡を検出した。遺物はほとんど出土していない。

第2遺構面 1区の第2遺構面上面で、大量の弥生時代中期の遺物が出土した。検出した遺構は、直径約30cmの柱穴3個と溝4条を検出した。柱穴は深さ約50cmの規模であり、建物としては、柱間から南に検出されないことから、擾乱で失われているが北に延びるものと考えられる。溝は、深さ10cm前後の浅いものであったが、SD201に関しては、上層に深さ40cm、幅80cmの溝（SD104）が切り合っていた。

3. まとめ 摻乱が著しく、遺構面もわずかしか確認していない。西側で実施した第22次調査結果を踏まえると、SD104は古墳時代後期（第22次調査の第1遺構面）、第1遺構面は、弥生時代中以降古墳時代初頭以前（同第4遺構面）、第2遺構面は弥生時代中期初頭（同第5遺構面）に相当する。

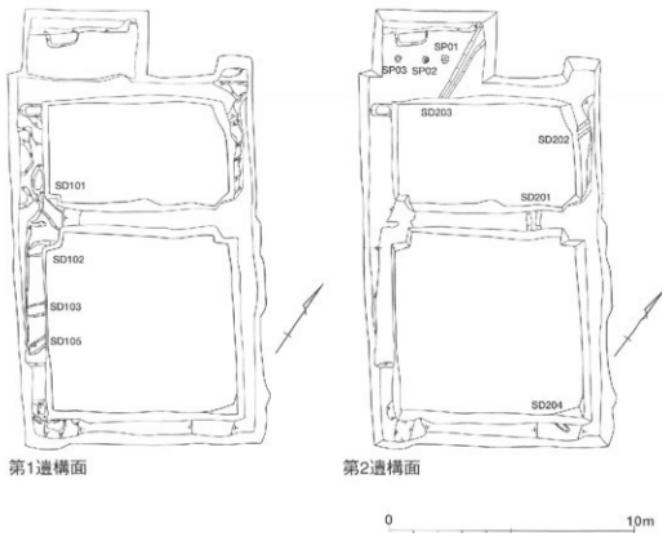


fig. 321 第2遺構面上面遺物出土状況



fig. 322 SD203・SP01~03

すまてんじんちょう 40. 須磨天神町遺跡 第3次調査

1. はじめに

天神町の地名の由来は菅原道実が九州への航海の途中、波風を避けて停泊した地との由来から造られた綱敷天満宮に由来するといわれている。昭和5年に設定された町名であり、比較的新しいものである。

須磨天神町遺跡は、須磨中央幹線築造に伴って実施した試掘調査の結果発見された遺跡であり、今回の第3次調査も同事業に伴って実施したものである。

地形的には、妙法寺川により形成された沖積地の西端付近であり、標高約14mに位置している。妙法寺川流域には、西岸・東岸とともにいくつかの遺跡の存在を確認しているが、西端付近は遺跡の希薄な地域となっている。

これまでの調査では、中世の井戸等が散在する状況を確認している。ただし遺構の密度は希薄である。



2. 調査の概要

基本層序

現地表面以下の土層は、上層より、現代盛土、褐色砂質土（近代盛土）、暗灰色粘性砂質土（近代耕土）、淡緑灰色砂質土、暗灰色砂質土、暗灰色粘性砂質土、緑灰色粗砂、黃灰色粘性土、暗灰色粘性土となり、遺構面の標高は13.3m～13.6mを測る。



fig. 324
調査区東壁断面図

明確な遺構は確認していない。調査区の南東隅で落ち込みを確認したが、自然地形によるものと理解できる。

遺物は中世の須恵器と土師器が、細片でわずかに出土しただけである。

3. ま と め 今回の調査では遺構は確認していない。ただし、少量だが遺物が出土しており、これまでの調査では中世の井戸等を確認している。この周囲に中世集落が存在することは確実であろう。

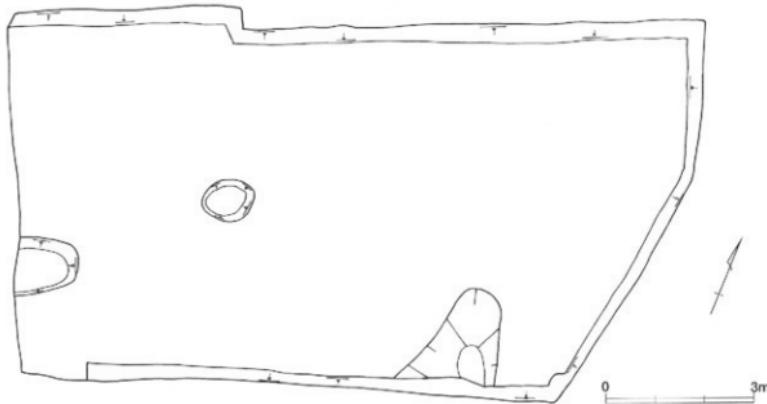


fig. 325 調査区平面図



fig. 326
調査区全景

41. たるみひゅうが 41. 垂水日向遺跡 第32次調査

1. はじめに

垂水日向遺跡は、神戸市西部の海岸部に位置する縄文時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。昭和63年から開始した、これまでの調査においては、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物群をはじめ縄文時代早期のヒトの足跡なども確認している。

今回の調査は市街地再開発事業に伴うもので、第16次調査のA区の南に連続する部分である。なお調査は、工事計画により影響を受ける上層の遺構面について行った。

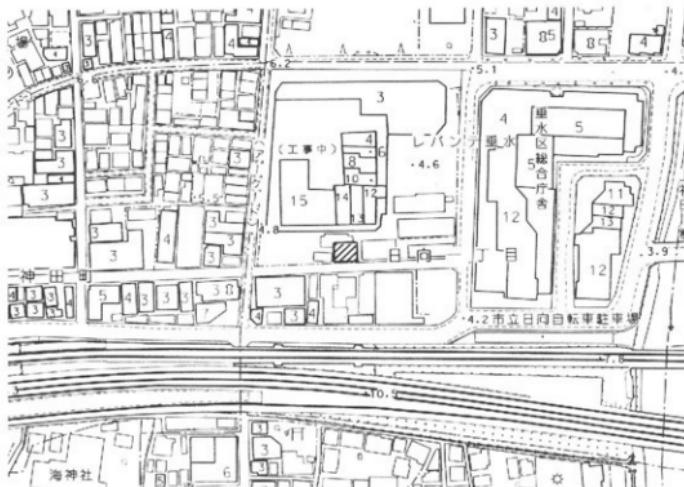


fig. 327
調査地位位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査区は、従前の建物の基礎による擾乱により、周囲と中央をちょうど「日」の字形に深く削平されている。

地形的には、北東から南西に下がる微高地から低湿地への変換点に位置していると考えられる。

基本層序

現代の盛土の下層に旧耕土および床土状の褐色土が堆積し、現地表下約70cmで中世の遺物を含む灰褐色土となる。その下層には、中世の遺物包含層である灰褐色粘質土、古墳時代の遺物を含む暗灰褐色粘質土が存在し、遺構面基盤層である淡黄灰色粘土および灰青色粘土となる。

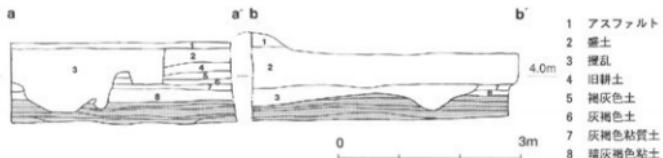


fig. 328 調査区西壁断面図

- 検出遺構 耕作痕と考えられる溝数条、落ち込み 1ヶ所、自然流路 1条を検出した。
- S D01~03 調査区の東部において検出した、幅15~20cm、深さ数cmの溝で、概ね南北方向に走る。中世の遺物が若干出土している。何れも耕作痕と思われる。
- 落ち込み 調査区の西側において検出した落ち込みである。調査地の西側に存在する低湿地へ緩やかに傾斜するものと考えられる。
- 自然流路 中央部を南北に流れる流路である。幅2.2~2.5m、深さ70cmで、断面形は半円形を呈する。中~下層にラミナ状の堆積を示す。磨滅した土器片、須恵器片が少量出土している。
3. まとめ 前回の第16次調査においては、調査区の南西部になるほど遺構は希薄となり、微高地から低湿地への変換点の部分に位置すると考えられた。
- 今回の調査では明確な遺構は検出されず、調査区の西側へ下がる落ち込みを確認したことから、第16次調査における認識を追認する結果となった。また、遺物包含層についても含まれる遺物の量は少なく、遺跡の縁辺部に位置していると考えられる。

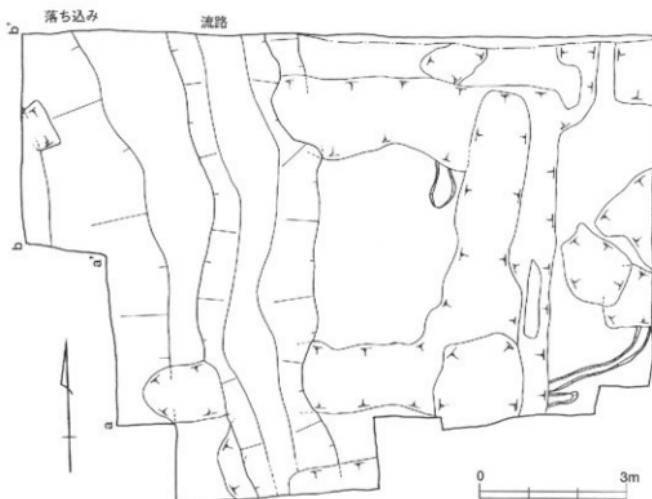


fig. 329
調査区平面図



fig. 330
調査区全景

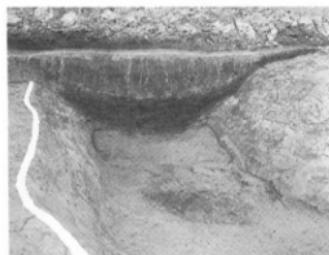


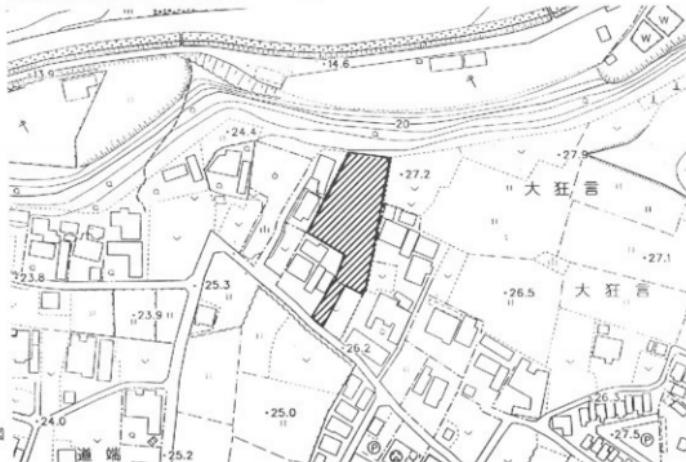
fig. 331
自然流路断面

42. 赤羽遺跡 第1次調査

1. はじめに

赤羽遺跡は、明石川の支流である伊川の下流域左岸の丘陵西斜面に立地する遺跡で、標高は約25m前後である。以前よりこの付近で遺物が採集されたと伝えられ、遺物散布地として知られていたが、これまで遺跡の実態は不明で、今回が初めての発掘調査となる。

赤羽遺跡の南側に隣接し、丘陵下位の緩斜面に立地する寒風遺跡では、都市計画道路の築造に先立つ調査において、古墳時代後期の堅穴住居や大壁造りの掘立柱建物などを確認している。また、平安時代中期の集落の存在も確認しており、古代山陽道に沿った明石郡衙関連の遺跡としても注目されている。



2. 調査の概要

新築される共同住宅の進入路部分と埋設管敷設予定部分について調査を実施した。

遺構面基盤層は、乳黃灰色極細砂あるいは礫混じりの乳黄色粘土で、東から西への緩やかな傾斜面となっている。遺構は調査区の南半を中心確認でき、北半部分では近世以降に完全に削平されてしまったものと考えられる。

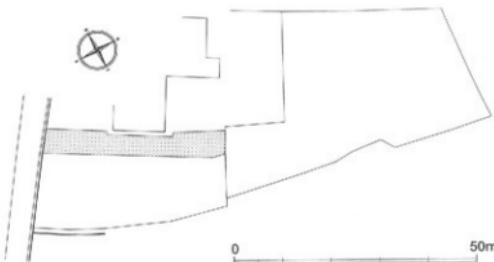


fig. 333
調査範囲位置図

- 検出遺構 溝状遺構、落ち込み、土坑、柱穴、ピットなどを検出した。
- S X01 調査区南半の中央部分を縦断する最大幅2.1m、最大深さ10cmの溝状遺構で、検出長は16.5mである。土師器片・須恵器片が出土しており、一部がS X02に切られている。
- S X02 不整形の落ち込みで、最大幅1.6m、最大長さ1.4m以上、最大深さ8cmである。埋土が他の遺構と相違する乳黄色シルト質細砂で、他の遺構よりも新しい時期のものであろう。
- S K01 長径0.95m、短径0.72m、深さ18cmの楕円形の土坑で、埋土は灰褐色系のシルト質極細砂である。
- S K02 S X01に切られる不整形の土坑で、長径1.45m、短径0.84m、深さ19cmである。埋土は暗乳色系のシルト質極細砂である。南壁に接して、黒色土器の底部が出土している。このほかに、柱穴・ピットを17基確認したが、掘立柱建物を構成するには至っていない。
- 出土遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器がある。その量は概して少なく、何れもが遺構の上面や埋土から出土したものである。平安時代中期から後期初めのものと考えられる。
3. まとめ 今回の調査では、対象面積が限定されていた中で、多くの成果を挙げることができた。集落址としての遺構のまとまりは判然としないが、平安時代中期から後期の集落の一部を確認し、これまで不明であった赤羽遺跡の実態の一部を明らかにできた。時期的にみると寒風遺跡との関連が想定されるが、今後の周辺での調査の進展を待って再考したい。

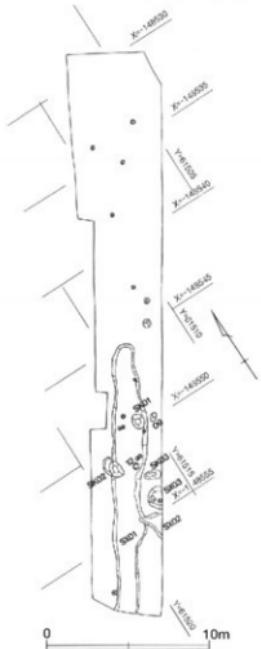


fig. 334 調査区平面図



fig. 335 調査区全景

かん ぶう 43. 寒鳳遺跡 第7次調査

1. はじめに

寒鳳遺跡は、平成7年に実施した試掘調査によって発見された遺跡で、明石川と伊川の合流点の東側、伊川に面した標高19m～23mの河岸段丘上に立地している。

現在のところ遺跡の範囲は、西区伊川谷町洞和字寒鳳からイガミ畠周辺を中心とした、南北約0.2km、東西約0.3kmと考えられている。

これまでの調査では、古墳時代後期の堅穴住居・掘立柱建物・大壁造り建物や平安時代の掘立柱建物などの遺構を密集した状態で検出している。特に古墳時代後期の大壁造り建物は神戸市内では最初の確認例で、渡米系の様相を示す遺構として注目されている。



fig. 336
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査地は、第3次調査の6区～10区の南側に接しており、西側から、6区南、7区南、8区南、9区南、10区南と呼称することとする。

基本層序

調査地西側（6区南～7区南）付近では、上層より、暗灰色砂質土（耕土）、暗黄褐色粘質土（床土）、暗茶褐色砂礫土、灰褐色粘質土、淡灰褐色粘質土、淡茶灰色砂礫土または淡茶灰褐色粘質土となり、地表下0.7～0.9m（標高21.7～22.4m）で、地山層である淡黄褐色砂礫土に至る。その上面が遺構面である。

調査区東側（8区南～10区南）付近は、後世の耕作等によりかなり削平されており、特に10区南付近では、耕土・床土の直下で、遺構面基盤層の黄褐色粘質土に至る。

検出遺構

今回検出した遺構は、古墳時代後期頃の堅穴住居9棟、掘立柱建物2棟、大壁造り建物3棟、柵列2条、土坑8基、溝状遺構12条、ピット200基等である。

検出遺構のうち、第3次調査で検出された遺構と同一であると考えられるものについては、第3次調査時の遺構番号と同じ名称で呼称している。

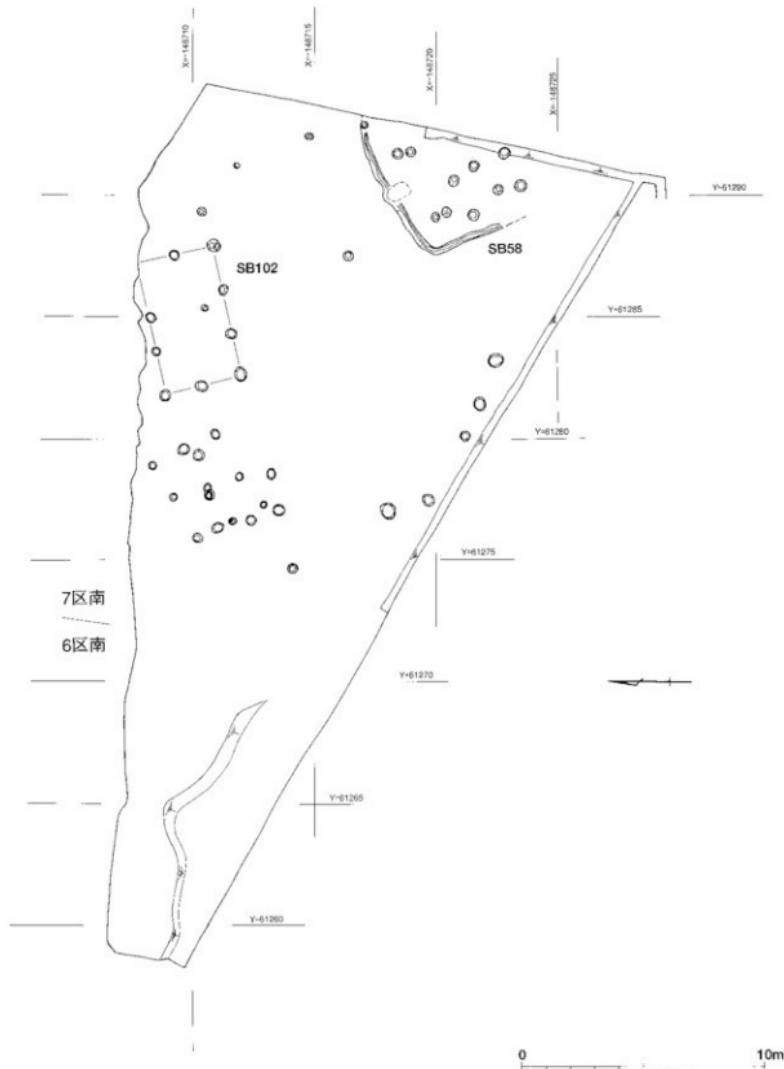


fig. 337 調査区平面図（1）

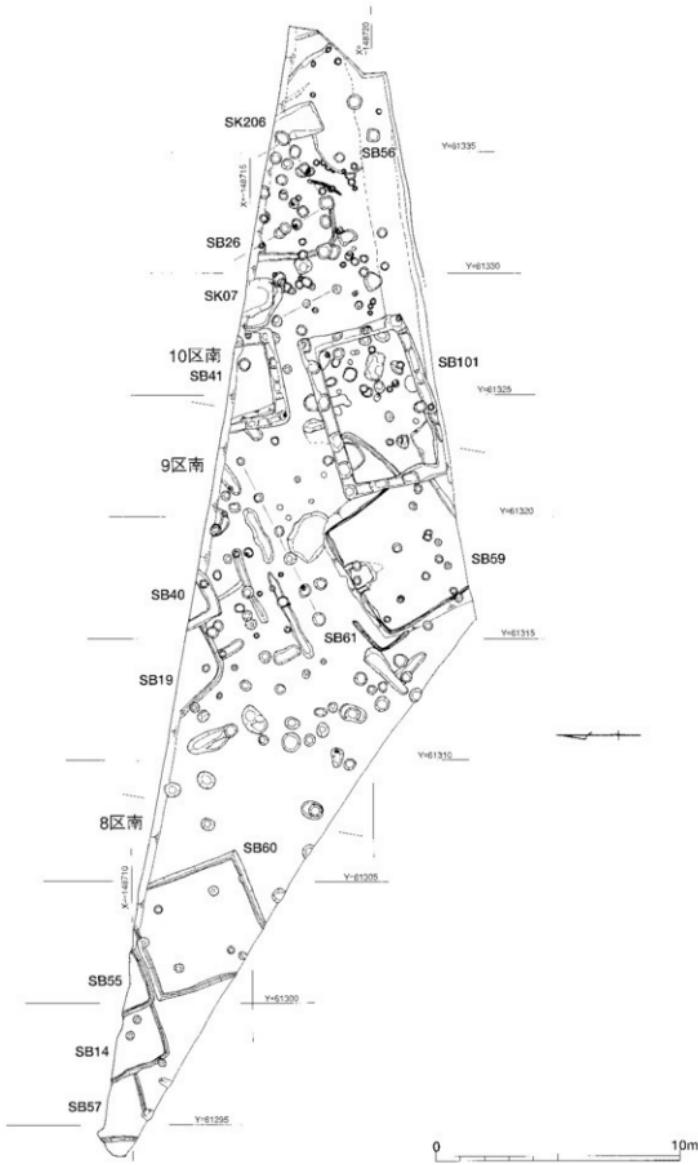


fig. 338 調査区平面図（2）

- 6区南～
7区南 6区南付近は、遺構面がかなり削平を受けており、遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。7区南付近では、古墳時代後期の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、ピット37基を検出した。
- S B58 7区南の南東側で検出した方形の竪穴住居である。東側は調査区外に延び、南側は削平を受けている。確認した規模は、東西6.5m×南北4.5m、深さ10～30cmを測る。主柱穴は4本と推定され、柱穴間の距離は、2.5～3.0mである。北壁際・西壁際には周壁溝が巡る。北壁中央付近に竈が設けられている。古墳時代後期頃の土師器甕等が出土している。
- S B102 7区南の北東側で検出した南北2間×東西3間の掘立柱建物である。削平を大きく受けしており、残存状況はあまり良くない。全体の規模は、東西5.4m×南北3.3mを測り、柱穴間の距離は、1.5m～1.8mである。主軸（長軸）方位は、N75°Eである。柱穴埋土から、古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- 8区南～
10区南 8区南付近では、7区南よりも遺構面が約30～40cm高くなっている。
- 8区南 8区南では、古墳時代後期頃の竪穴住居4棟、ピット5基を検出した。
- S B14・55・57は、以前の調査時に検出しておらず、埋土の重複関係から見て、S B57→S B14→S B55の順で新しくなると考えられる。
- S B14 8区南の西側で検出した方形の竪穴住居である。今回の調査では、南側の約1/4を検出した。全体の規模は、以前の調査成果を合わせると東西5.5m×南北5.7m、深さ5～10cmを測る。主柱穴は4本で、壁面に沿って周壁溝が全周している。竈は検出していない。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B55 8区南の西側で検出した方形の竪穴住居である。全体の規模は不明であるが、確認した規模は、東西3.0m以上×南北1.5m以上、深さ5～10cmを測る。壁面に沿って、周壁溝が巡る。S B55に伴うと考えられる柱穴及び竈は検出していない。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B57 8区南の西端で検出した方形の竪穴住居である。東側はS B14に切られており、北側は削平を受けているため、全体の規模は不明であるが、確認した規模は、東西2.7m以上×南北3.0m以上、深さ5～10cmを測る。壁面に沿って周壁溝が巡る。S B57に伴うと考えられる柱穴及び竈は検出していない。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。

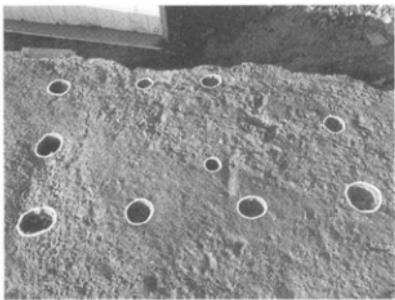


fig. 339 S B102

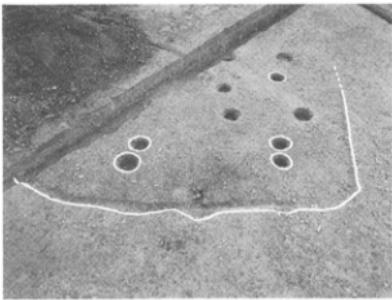


fig. 340 S B58

- S B60 8区南の東側で、今回新規に検出した方形の竪穴住居である。全体の規模は東西4.8m ×南北5.5m、深さ10~20cmを測る。主柱穴は4本で、周壁溝が全周している。南隅は削平されている。竪は検出していない。
- S B19 9区南~10区南付近では、竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、大壁造り建物3棟、柵列2列、土坑8基、溝12条、ピット172基を検出した。
- S B18 9区南の北側で検出した方形の竪穴住居である。東側はS B40に切られ、北側はS B18と重複しているため、全体の規模は不明であるが、東西7.5~8.2m、南北8.0~8.5m程度であったと推定される。壁面に沿って周壁溝が巡る。S B19に伴うと考えられる柱穴及び竪は検出されなかった。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B56 10区南の東側で検出した円形または隅丸方形の竪穴住居である。北側はS K205に切られており、北側はS D17と重複しているため、全体の模様は不明であるが、確認した規模は、東西3.5m、南北2.0m、深さ20~30cmを測る。北壁及び東壁のみ確認できたが、周壁溝は検出していない。S B56に伴うと考えられる柱穴及び竪は検出していない。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B59 9区南の南端で、今回新規に検出した方形の竪穴住居である。南壁の西側は調査区外に延びている。確認した規模は、東西6.0m ×南北5.5m、深さ20~30cmを測る。主柱穴は4本で、壁面に沿って周壁溝が全周している。

北壁中央付近には、竪が付設されている。この竪は、焚口部及び袖部とともに明確ではなく、廃絶時に破壊された可能性が考えられる。

東壁はS B101の西側周溝と重複しており、埋土の前後関係から、S B59→S B101の順に構築されたと考えられる。埋土の堆積状況は、一時期に人為的に埋め戻された可能性を高く示すもので、S B59の廃絶後にあまり時間が経過しないうちに、S B59を埋め戻し、S B101の西側周溝を掘削したものと考えられる。古墳時代後期頃の須恵器・土師器等が出土している。



fig. 341 S B14・55・57・60

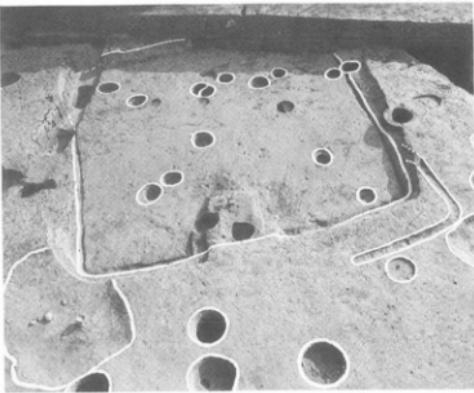


fig. 342 S B59

- S B61 S B59のすぐ北側で検出したL字形の溝状遺構であるが、おそらく方形の竪穴住居の周壁溝に相当するものと考えられる。確認した規模は、東西1.8m、南北1.5mを測り、溝の幅は、10~15cm、深さ5~10cmを測る。南側はS B59に切られている。
- S B26 10区南の東側で検出した東西2間×南北4間の掘立柱建物である。全体の規模は、東西3.2m×南北5.0mを測る。柱穴間の距離は、1.2~1.5mである。主軸（長軸）方位は、N 31° Eである。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B40 9区南の北端で検出した大壁造り建物で、北側は、第2・3次調査区に延びている。以前の調査成果を含めて検討すると、全体の規模は、東西6.5m×南北5.0mを測る。主軸（長軸）方位は、N 60° Wである。周溝は全周している。周溝に開まれた内側の床面の規模は約20m²である。周溝内の底面には、0.8~1.2mの間隔で、梁間3~4間分、桁行5~6間分の柱穴が設置されている。柱掘形の直径は直径30~50cmで、深さは、周溝内の底面から10~20cmを測る。柱掘形内に柱は残存していないが、この柱を主柱穴として壁材を支持していたと考えられる。周溝内及び柱掘形内から、木舞とみられる部材やスサ入り粘土等の壁材は、検出していない。
- 周溝の埋土及び柱掘形内より、古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。
- S B41 S B40の北東方約1.5mで検出した大壁造り建物で、北側は、第2・3次調査区に延びている。以前の調査成果を含めて検討すると、全体の規模は、東西4.0m×南北7.2mを測る。主軸（長軸）方位は、N 21° Wである。周溝は全周している。周溝に開まれた内側の床面の規模は、約16m²である。周溝内の底面には、0.8~1.3mの間隔で、梁間3間分、桁行6間分の柱穴が設置されている。柱掘形の直径は40~70cmで、深さは、周溝内の底面から20~40cmを測る。構造的には、S B40と同様のものと推定される。周溝内及び柱掘形内から、木舞とみられる部材やスサ入り粘土等の壁材は検出していない。周溝の埋土及び柱掘形内より、古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。

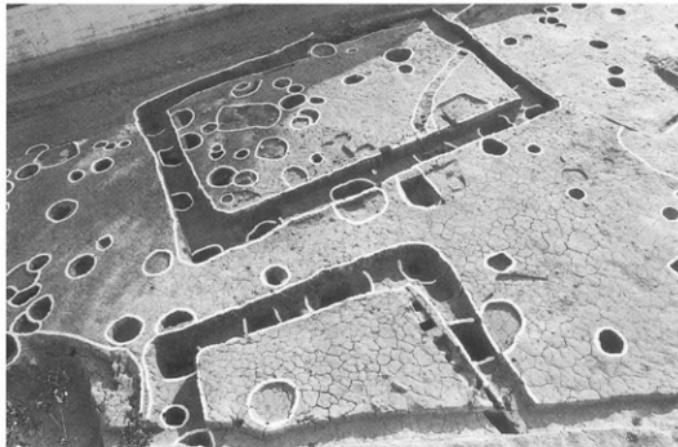


fig. 343
S B41・101

S B101 9区南～10区南の中央から南側にかけて、今回新たに検出した大壁造り建物である。全体の規模は、南北4.7m×東西6.8mを測る。南側の一部のみ調査区外に延びているが、おそらく周溝が全周するものと考えられる。主軸（長軸）方位は、N73°Eである。周溝に開まれた内側の床面の規模は、約20m²である。周溝内の底面には、1.0～1.6mの間隔で、梁間3間分、桁行5間分の柱穴が設置されている。柱掘形の直径は40～80cmで、深さは周溝内の底面から30～50cmを測る。周溝内の堆積状況を詳細に観察した結果、柱掘形及び周溝底部は版築状に埋め戻している。周溝のコーナー部及び一部の柱掘形内において、柱痕を確認しているが、柱痕は上層の暗灰白色粘土を切っている。西側周溝内の暗茶褐色粘質土または茶褐色粘質土は、S B59の埋土と同じものと考えられS B101は、S B59の廃絶後、あまり時間的な経過を経ずして、構築されたものと推定される。周溝の埋土及び柱掘形内より、古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。

S K07 10区南の北側で検出した楕円形の土坑である。北側は、第2・3次調査区に延びている。以前の調査成果を含めて検討すると、全体の規模は南北4.6m×東西2.2m、深さ50～60cmを測る。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。

S K206 10区南の北側で検出した楕円形の土坑である。北側は、第3次調査区に延びている。以前の調査成果を含めて検討すると、全体の規模は、南北2.4m×東西1.3m、深さ20～30cmを測る。古墳時代後期頃の須恵器・土師器が出土している。

出土遺物 各遺構埋土内及び遺物包含層から、須恵器、土師器、サヌカイト剥片等が総量で、28ℓコンテナ約60箱分出土している。



fig. 344 S K206

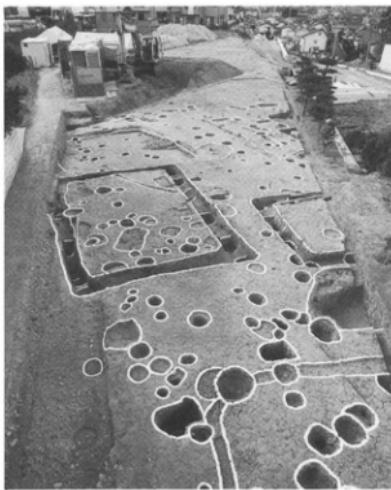


fig. 345 9区南・10区南全景

なかでも、古墳時代後期頃の須恵器・土師器が最も多い、須恵器では壺蓋・壺身・高壺・壺等があり、土師器では高壺・壺・壺等のほか、土錐や製塙土器等も出土している。

遺物整理が未了のため、検出遺構の詳細な時期については明確でないが、第3次調査と同様、概ね古墳時代後期（5世紀末～6世紀中頃）に属するものであると考えられる。

3. まとめ
- 今回の調査で最も注目される遺構は、大壁造り建物である。同建物については、当遺跡では第2次調査において初めて確認し、今回の調査を含めて少なくとも5棟が存在することが判明している。

これまでの調査では、調査範囲の関係から、同一調査で1棟の大壁造り建物を完全な形で調査する機会に恵まれなかったが、今回の調査では、新規に検出した1棟については、ほぼ1棟分を一度に検出することができた。さらに、周溝内埋土の詳細な堆積状況の観察等により、大壁造り建物の構造を検討する上において、重要な資料を得ることができた。大壁造り建物については、渡来系氏族と関連が深いとされる滋賀県の湖西地域で多く確認されることや、京都府森垣外遺跡例のように陶質土器が出土したり、韓式系土器や初期須恵器が共伴する事例が散見すること等から、朝鮮半島からの渡来人との関連が示唆されている。しかしながら、当遺跡においては、現在のところ、明確に渡来人との繋がりを示す遺物は発見されていない。この点については、今後更に検討を重ねる必要がある。



fig. 346
調査区全貌

44. 新方遺跡

1. はじめに

新方遺跡は、昭和45年に始まる山陽新幹線建設に伴う試掘調査で発見された遺跡で、弥生時代から中世にいたる集落遺跡として周知されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、平成11年1月の試掘調査で3層の遺物包含層を確認したことから、據壁等によって遺跡に影響を及ぼす範囲約34m²について発掘調査を実施した。

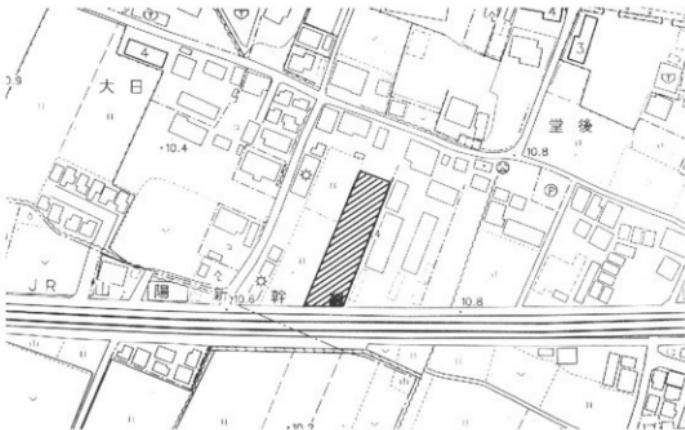


fig. 347
調査地位位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の発掘調査では、南側道路に設置されたKBM : L = 10.00 mを基準とした。以下の記述及び図面のレベルはこの基準値によるものである。

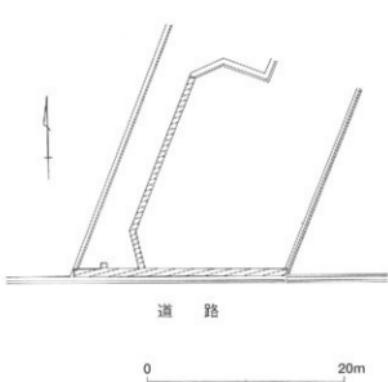


fig. 348 調査範囲位置図

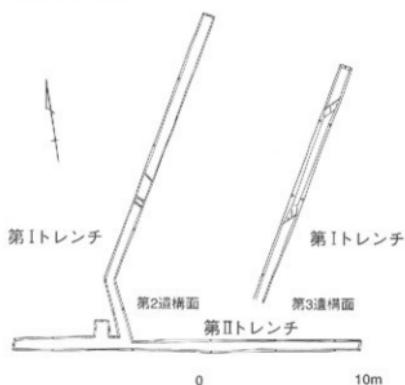


fig. 349 調査区平面図

基本層序 現地表以下の土層は、表土（耕土）→明黄褐色シルト→灰色シルト（第1遺物包含層、表土下約40cm・L=9.30m）→明黄褐色シルト→灰色粘土（第2遺物包含層、表土下約40cm・L=9.10m）→灰黄色細砂（遺物を極少量含む）→灰黄色シルト→明黄褐色粘土（弥生時代自然流路基盤層）→灰色粘土→暗灰色粘土（第3遺物包含層、表土下約1.1m・L=8.60m）となっている。

第1遺構面 灰色シルト（第1遺物包含層）は旧耕土と考えられる土層で、その上面で精査を実施したが、珪畔等は検出されなかった。平安時代から室町時代と思われる土器などが出土した。

第2遺構面 灰色粘土（第2遺物包含層）も同じく旧耕土と考えられる土層で、第Iトレーニチの中央付近で東西方向の低い段状遺構と、浅い溝状遺構を検出し、それを挟んで両側と第IIトレーニチの上面でウシの足跡と考えられる多数の蹄印を検出した。

第3遺構面 灰色粘土層中には、5世紀から平安時代後期頃の須恵器・土師器の細片を含んでいる。

自然流路 幅約5m、深さ約0.7mで、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）と弥生時代終末期（庄内式期）の土器片が少量出土した。

トレーニチ北端部では、流路北側の立ち上がり部が見えたが、これは最終の断ち割り調査の結果、流路埋没のある段階での肩部ということが判明した。本来の北側立ち上がり部は当調査地区の更に北側にあるものと考えられる。

暗灰色粘土（第3遺物包含層）については、建築工事の影響レベルがL=8.70mで、直接の影響を受けないと判断されたが、当層も弥生時代に遡る耕作面に相当する可能性があり、その場合には珪畔等が工事の影響を受けるものと判断され、かつ正確なレベルを把握する必要もあったため、その一部について上面まで調査を実施した。

上面まで確認したのは、第Iトレーニチでは自然流路南端より南約3mまで、第IIトレーニチでは中央付近約4mの範囲である。結果、この範囲に関しては、珪畔や足跡等の遺構を検出することはできなかった。

また、断ち割り等も実施していないため、層厚・包含遺物等については不明である。

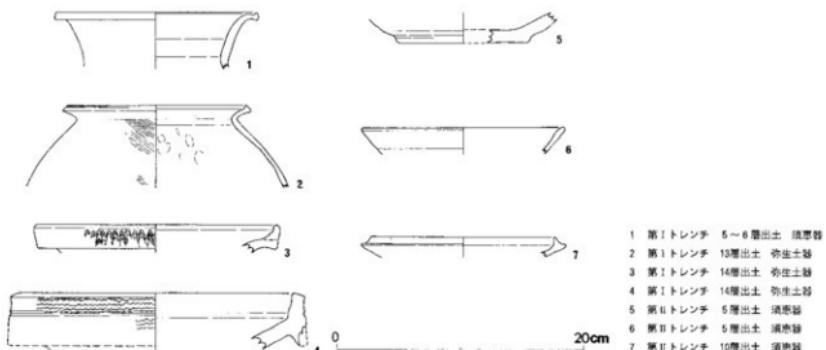


fig. 350 出土遺物実測図

しんぱう の て せいほう
45. 新方遺跡野手西方地区 第4～6次調査

1. はじめに

新方遺跡は、明石川本流とその支流である伊川の合流する地点の北側一帯の沖積地に広がる遺跡で、標高は8～10m前後である。昭和45年の山陽新幹線敷設工事に先立つ調査を皮切りに、これまで度重なる発掘調査を各地区で実施してきており、弥生時代前期に遺跡の形成が始まり、鎌倉時代前半まで継続する複合遺跡であることが徐々に判明してきている。なかでも、弥生時代中期の玉造り関連を含む豊富な遺構・遺物は大規模拠点集落としての位置を揺るぎないものとしており、古墳時代後期初めの玉造工房址の確認も遺跡の内容を特徴づけるものとして知られている。

今回、神戸市野手西方土地区画整理事業に伴って3次にわたる調査を実施した。

以下、その概要である。

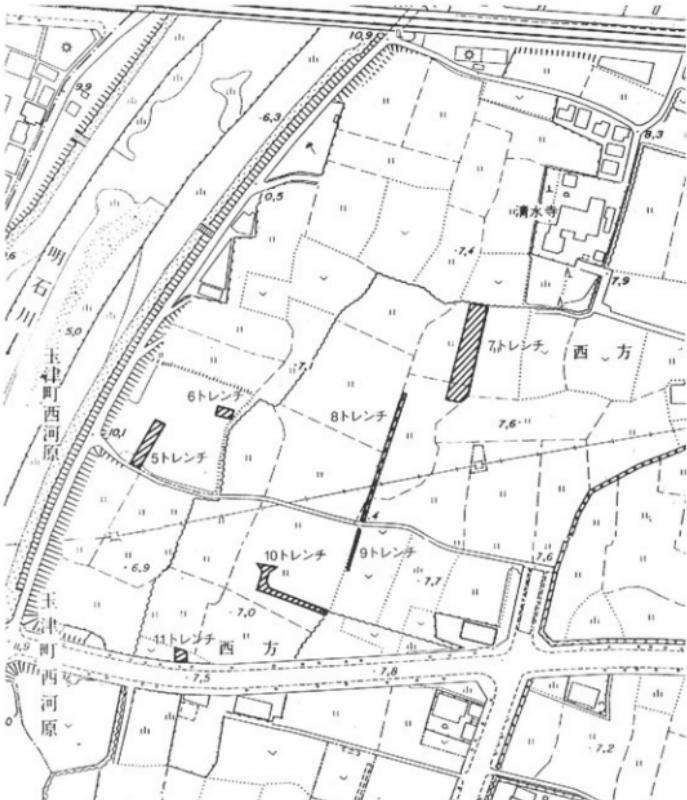


fig. 351

調査地位置図

1 : 2,500